Title	『玉造物語』翻刻・校異・解題(上)
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1990
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.25 (1990.) ,p.233- 275
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000025-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『玉造物語』 翻刻・校異・解題（上）

石川透

例言

一、本資料は、『玉造物語』の翻刻・校異・解題である。翻刻の底本には、大東急記念文庫蔵写本一五冊（合一四冊、函架番号、四三・五・三三八六）を使用した。本号は「上」として、底本の第一冊から第八冊までの翻刻を掲載した。第九冊から第一五冊の翻刻、校異・解題は、「下」として本誌次号に掲載予定である。

一、翻刻に際して、以下の方針をとった。

- 1 漢字・異体字は、おおむね現行書体に改めた。
- 2 短歌・長歌は、末尾が地の文に続いている。翻刻では、一首全体を二字下げにし、後続文は改行した。
- 3 底本には補入箇所が存在する。翻刻では、本行に組み入れたが、校異にその旨を記した。
- 4 底本には朱による濁点・読点が存在する。翻刻では、濁点は底本通りに記したが、読点は底本を基本として諸伝本により補入した箇所がある。
- 5 本文上の意味不明箇所は、煩多になるので、私による

(ママ)は記さなかった。数箇所にもママ等とあるものは、
底本に存在するものである。

6 底本の丁数は、その頁の末尾に()をもって記した。

一、貴重な御蔵書の翻刻を御許可賜わった大東急記念文庫に厚く御礼申し上げたい。

一、本資料調査に当り、文部省科学研究費補助金(奨励研究・特別研究員)が利用されている。また、本資料の発表は、斯道文庫共同研究課題のうち、室町時代物語類の研究調査にもとづくものである。

たまつくり物語 一 (題簽)

玉造物語

- 一 そとをり姫
- 二 李夫人
- 三 きつね
- 四 こたまの絵
- 五 きのふの夢
并に仁王会
- 六 すきくるま(1オ)
并にたかの山
- 七 なそへなぎ花
- 八 いもせ
- 九 たまの通路
- 十 うつろふはな
- 十一 いろこのみ
- 十二 みとり子
- 十三 月のみやこ(1ウ)
- 十四 やうきひ

十五 たつき

十六 夢の内のおとろへ

此巻脱篇

十七 ゆめあはせ

十八 せきてら

十九 あかたのをしへ

廿 玉つくり(2オ)

廿一 夢のあけつらひ

廿二 一むらすゝき(2ウ)

そとをり姫 一

いまのおほんときを、いづれのころと、たどりてか、こゝらま
します、おほやけごとを、しかり、しからずと、うたがひ、ま
いらすべき、とよのあかり、きこしめすに、みかど、おほんこ
と、ひかせ給へば、きさいのみや、かなでさせたまふ、まいの
ためしの、うけごとゝかや、おんな、たてまつらせたまふ、な
かばねは、たれとかいふ(3オ)らん、わらはがいろとの、そ
とをりひめ、雪のいろ、花のかほ、月のきら／＼しさ、いとゆ
るかなる、かぜだにふかねど、をのがならひに、うちなびく、

あけぼのゝかすみ、みどりのしだり、いたうこよなき、柳のい
とは、ほの／＼ふくまに／＼、見るにたえぬるかは、かゝるす
がたの、てりかゝやきて、おんぞ、すきとをりぬれは、よびと、
その名よせたるなり、たてまつりぬかし、(3ウ)みかど御む
かへまひらせたまへと、あねのきさひのみやの、みおほえ、お
ぼつかうて、まいりたまはて、七たびまで、おともなかりけ
れは、このたびは、いかつ、まひれと、おほせごたます、なれ
がはかりことゝこそ、しろしめすらめ、をとひめの、やどのに
はべに、七日七夜、おきもせず、けもたえて、ふしをれば、あ
はれにたえぬなさけに、いかゞは、(4オ)やみや、見おはしま
すべき、よしや、かゝる、もふひとの、みまかりたまはゝ、わ
らはが、よゝのつみ、いかゞはせんとて、まいりたまふ、あをに
よし、ならのかすがのさとに、をきまひらせて、かぎりなう、
見まくほしみ、おほしめしけるを、きさいのみやの、みこゝろ、
いかゞはおはすと、月のみそかも、いくめぐり、みゆきせさせ
たまふこともなきは、かしこき、きみの(4ウ)みこゝろ、げ
にたぐひなし、かくて、やゝ、うかどひて、しのびみゆきに、
ことよぎしませば、きゝしは、ものかは、ちはやふる、神代に
も、かゝる人やあらん、夢にあけたる一夜の御なこり、いく

らの御おもひか、おはしましけん、一日もどまりおはしまさ
で、かえりみゆきの、みこゝろ、想ひやりまひらするも、おろ
かなるべし、かくて、又月日へてなん、(5オ)みゆきなした
まふ、たゞずみ、おはしますは、をとひめは、夢しろしめした
まはで、

わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかね
てしるしも、

とよませ給ふける、ことの葉のふしの、みやびかなる、ながめ
のたけのゆうなる、しなは、えんなるにあまり、にほひは、い
ろにこぼれ、ながむれば、玉したがひて、めぐ(5ウ)るなめ
り、かゝるためし、とめをける、とりのあとしも見えず、わら
はも、歌よまば、かうやうのすがたにこそと、おもふるに、と
もしひ、ほそ、う、すぎよはの、人けなき、ねやのうちに、見
もなれぬ人なん、たゞずみおはす、おどろきこゝろに、うち見
れば、さくらがさねの、にほひはなやかなるに、くれなるのは
かまの、香もゆらにふみ(6オ)くゝみ、もち月のひかり露こ
ぼれて、くもたちいづる、かほかたちにあなる、君はあめがし
たの、歌よみなるべし、かならずこそ、おほやけに、めされな
め、ことこのこゝろ、あらざらめやは、おもひわひためて、こゝ

ろとめずは、ほゐなからん、人は、なからんあとの、名のにほ
はしきと、いけるあいたの、とみのいろくしきと、もろとも
なるは、まれ(6ウ)にも、あるはすくなかるへし、とみは、
とよせ、はたとせの、夢のあだよの、あだことなり、名は月日
とおなじ世、おなしひかりの、世中てらしぬる、これにしもか
えとりたまふへしや、

たちかへりまたもこの世にあとたれはゆかしかるへき和歌
のうら波、

とこそ、よみつれ、あれも、たちかへる、(7オ)和歌のうらべ
の波にこそ、あとたれ、さふらへ、君も又、わかのうらなみ、
たちかへりこぼ、我すむかたに、あとたれませ、ともに、かた
らひ、歌よみなん、歌は、こゝろのやはらぎ、とけて、まめに、
きよかる、玉こゝろなり、此こゝろこそ、あまつ神なれ、これ
なん、歌になる身の、かみのみたま、身なりけり、かのすみの
江の(7ウ)松は、歌のちゝ、わがすむまつは、歌のはゝ、と
こさだかなる、きよらまくらゐの木なり、歌の身の、ときはの
松に、すむなる、たのしひ、いくちよぞや、女の歌は、おだや
かなるべし、女は、おとこに、さきたち、さかはざらまし、こ
や世中のことはりならん、歌は、そのことはりのすがたを、こ

との葉のいろに、うかめよむなめるを、(8オ)おろそかに、よみて、のりふみこえぬるや、かみも、あめも、みなつまはじきをこそ、したまはめ、よの事も、身のことも、歌のすがたに、あなるものを、

歌の身のちとせのえたにすまひすも松のみさをに世をしも
れはや、

御返しをたてまつる、

世をしもる神すまひますひめ(8ウ)松のみさををませる

和歌のうらなみ、

御ころよげにして、たちもとります、ものから、はや見えさせたまはず、げにな、女はきよかる道まもる、そのあまりは、男にさかひ、うちもとらふことはりは、つやく／＼なかる事なるを、ひなびたる、けぎとき女は、われこそちしきなれと、男、をしもどきて、われおとこの代にかはるや、男、女(9オ)ののりに、そむければ、神もいかでか、よろこひ、おはしまさむ、ちはやふる神代のむかし、女みことの、此くにうみ給へるさへ、たゞ一ことの、おとこみことに、さいだちたまふとて、よもつぐにへなん、入せまし／＼けるとそ、やまと歌は、男女の中のことを、せちにいふも、むべなることにそあめる、此あいだに、

よしあし、たらずめのことこそあらめ、(9ウ)かゝる、いみじき歌を、あらぬさま、さがなき心に、よみなして、神のみ心、ころよからぬに、なしはてなば、なすらへもなき、つみ、いとおそろし、いでや、このうち、みだりがはしく、ことの葉、つらぬべきかは、さきにあるにし、ことのはとも、さぞや、うたてしきことこそ、あらめ、ことにふれたる、たはむれ事、みなかきけちてまし、歌は、人のうたか(10オ)は、わが歌なり、よきも人の名かは、あしきも人のはぢかはと、いふ人もありけり、これも、この道ひたすらしらぬなるべし、かみの御身なる歌、わがよむとても、などかは、わが歌ならん、みそもじあまり、一もじの、そのひともじも、こはかくせましと、わがころまかせの、はからひの、まに／＼、むかしの人の、あとろし、かゝることをも、しらざりけるよ、われも人も、おほくは、歌のつみ人なりけり、人のみぬまの、たはれごと、人きかぬ日の、ひとりごと、神は、のこらでしろしめすにぞ、かくおもふによせて、おもへば、又おもひえたる事もぞある、歌は、ことの葉のあやなる物よ、あやよくおりにし、をりものゝ、おりめ、をりいと、よからざる(11オ)あらんかは、みそもじあ

まり、一もじの、そのひともじも、おろそかまけることや、あ
るべきてふ、しかのみおもひて、ものらふことのは、又一こと
も、よからざるあらば、人のことの葉にはあらじ、ことのは
よ、いづこより、おこりて、何の事をか、いふならん、こよろ
よりこそおこれ、身の事をこそいへ、そのもとの心よからず
は、そのすゑの、ことの葉よしとて、(11ウ)そはみな、あ
だしこと成べし、歌によむなる、花鳥の、いろの、をとの、と、
そのしなえらぶなん、などそのもとの、わが身のわざの、こ
は、そは、そのことのしなをしも、えらばざりけん、よからぬ
事すれば、世こそりて、いひそしり、君ひととはた、これをにく
む、歌よみなん人は、ことの葉よりも、まつ心と、身と、しな
えらびて、お花がす(12オ)ゑにをきぬる露、なをくだけで、
ちる露も、人のとがめなんこと、せず、いはず、なをおもはざ
るべし、こよろをくるしめ、身をやましめ、はぢがはし、人の
ことの葉、けがす、たがとがぞや、歌よりも、なをこのことを
こそと、おほひたり、東の三条にありける、めのと、までき
て、此ころは、きみの歌よませ給ふ、くだりゆき、のほりま
(12ウ)ひる、しづがことの葉にも、聞さふらへ、いかなる人丸
にか、わたらせ給ふ、いでや、そのふの花、うつくしきに、聞

えさせたまへ、人の物いふに、いつはりなくや、さふらはせ給
ふらん、こは、いかに、人のもうしかけなどせば、はやことば
のしたに、いちはやき、みやびもこそあらめ、さやをそから
ば、いかに、人もほめたてまつるへきや、(13オ)名のくだる
こそ、人はおそろしけれ、けううちさめてげれば、はやも、よま
ばこそ、よまめ、人のざえも、かぎりあることにしあれば、弓
とりのはやゐの、まとのほかゆく矢を、げいは、よしとやいは
ん、かはらけのみきの、かはくまもなう、もよつことの葉、よ
にはあれども、かのかどいでしより、しもつかたの、けふまで
も、かよりしきへ、ふたりやは(13ウ)ある、そのまねする
は、をのがかぎり、しらざるらめ、歌よみの名、もとめとり
て、何のことぞや、物はもとむるは、よき人のせぬなり、をの
づからならば、又まかせなまし、かつやぶるとこそ、ひぢり
は、の給ひつれ、歌よみて、はやみくるや、をそみいづるや、
我かぎりを、こよろみもて、身のかぎりしりて、それにまかせ
て、ものせんこそ、歌の道しるなら(14オ)め、そのかぎりも、ま
だしらくに、身にもおはざる、もよつことの葉、まかせえた
る、まね、うちして、くせ歌よみ、もて、人なしに、もよがほせ
んは、歌しらぬ歌よみなるべし、歌よくよまぬてふ、なにのおも

なきことぞ、手たれの名ほしく、くせごととして、人のまゆひく、
それぞおもなかるへき、人丸こそ、よみませ、われはよまぬなり
けり、い(14ウ)まし、といひぬるのみかは、たれとももうすなる、
まかなくに何をたねとて浮草のなみのうね／＼おひしける
らむ、
とよみつるを、人はよしといへれと、まことは、よきことの葉
にはあらず、

おきのひて身をやくよりもかなしきはみやこしまへのわか
れなりけり、(15オ)

かくよみしも、ほめられにたるを、なれば、まことよやおもひ
けん、歌てふものは、かゝるすがたには、あらぬなるべし、け
ふの日までも、せめては、にたるさまの、一ことも、よまばか
は、さらにしもまた、よまなくに、なにのたえたる、ことの葉
のしたの、ことかあらんとて、(15ウ)

玉つくり物語 二 (題簽)

りふ人 二

月の出をぬるかたの、くにより、人まふできて、いとあてに、

うつくしき女の絵を、さふげたてまつりにけり、これは武帝と
かやもふせし、からくにのみかどの、李夫人といひし人の、身
まかりたりけるを、こひしのびて、おさめますべきことも、(1
オ)あるべくもあらず、なりにければ、そのもふけの君、はか
らひ給ふて、殿上にて、たまかへすたきもの、たかせおはしけ
れば、そのかたちけふりのうちに、あらはれ見えたるを、もの
ゝてたれの、にせゑにうつして、みかどをなぐさめまひらせし、
その絵なりけりとなん、清涼殿にかけ、みて(1ウ)うなをさ
せ給ふて、ゑるらんせさせましましければ、清涼殿のひさし本
のま、の 大ゆかまで、こびこぼれわたりけり、このうな
ばらの東には、かゝる人、むかしものちも、ありぬべしやなど、
人／＼もうすに、なでうなくてはさふらはん、こゝはなを神の
みくにの、あてなるみくになり、(2オ)むかしはどをつよの
こと、はからひしるべきかは、いまの世の人の中にも、あるな
るところは、聞さふらひつれと、もうせば、そはたれなるらん、
そうしたてまつれ、いやそうもんこそと、とり／＼しきなみな
めり、をのよしぎねがむすめこそ、聞えけるものを、とばか
りながら申すを、藤中納言かくとき(2ウ)うしまひらせけれ
ば、後日こそあはせさせたまはめとて、かゝけさせて、まきお

さめて、からひつして、やみおはしましけり、節会のつゝめでの
日、希代のためしもこそあれ、をのゝ小町めせとて、おほせご
との、御つかひの、やみがたう、もだすべきよしもこそなけれ、
見もせぬ、雲のうへま(3オ)でゆきのぼりて、たましきのに
はふみしたくも、まばゆき、玉のみはしは、あまつそらにも、
かゝるやと、うちのぼりつ、何とはしらぬ、から人の、たくみ
かけるに、たちならべとて、おしならぶるも、いとおもなしや、
見る人く、絵はひかりなし、ありし百のこびは、いづちゐに
けんと、つぶや(3ウ)くを、みなしかくとなん、そうしま
ひらせしは、たれにかは、上もそむかせたまはぬみこゝろなり
けりと、をひくきこえけるに、ゑいりよ、いかゞおはしまし
けん、何の、みさたもなうて、くれなんとする、としのしはす
のころ、またほのめきて、うたもよむなめれば、みやづかへせさ
せよと、めさ(4オ)れしに、ふた月三月過行に、おほんこゝ
ろも、ありげなりければ、時はやよひの空かけたる、うちなが
めさせ給ふ、おほろ夜の月によせて、よみてたてまつりける、
なかめつゝおほろ月夜のいろとへはにほふかすみのそめに
けるてふ、
いかならん女御更衣にもと、おもふ(4ウ)ならひもこそあれ、

身をは、くさのいぬとは、君をおもふのかぎりなるを、うき世
の、ちとと、そなはらせ給ひて、世のためおぼしめし、とらせ
たまはでやあらん、御返し、

くもの上にともになひかんひかりけちて月夜すめともはる
くかすみか、

さしもの、から(5オ)くにの君も、此ことには、御世わすれ
たまひけんかし、あめがしたに、御こゝろにしたがはさらんを
ば、とをつしまべの、やらひもこそあらめ、をりにふれたるみ
けしき、しのびおはしますなる、人のため世のためとや、月い
とあかくをとほの峯さしいでたる、御かはらけ、た(5ウ)て
まつりければ、

なかめぬる人にもものをおもへとやあやにくにしもすめる
月かな、

又

なかめしよ月にうかれは世をおもふこゝろやともそらに
かくれむ、

御返したてまつる、

ためしにもまたきかなくに(6オ)詠さして月ならてよを
てらすてふをは、

又

雲のうへに月のすみます御よとてや民もまよはぬなかめし
ぬらむ、

あをうみのにしのためしにも、此ことよりぞまつりごと、いつ
しかあとかたなうなりて、あやしきものゝ、たばかりにもおち
けめ(6ウ)と、いやおほむつゝしみ、ますらおの、みこゝろ
づかひの、弓引はり、ぢじうあまたさふらひぬるには、御たは
ふれの、うちわらはせ給ふしなましますを、人け見えぬひま
くには、御ことの葉だにたはれさせ給はず、けにことにもの
するかな、歌もあやしうよむ、むかしの歌の、人とはにな(7
オ)がめぬべかめるを、ぢじうの中にこうじて、女のこゝろた
けさせよ、おろかなるは、いや人をこそまどはせ、こよひの御
ゆうこれならんと、人はさはいへど、かゝるおほせは、身にこ
そおはね、こと人こそともうすを、なをもくこのうへは、み
ことのみ、そむき、たてまつるべきにしもあらねば、かた(7
ウ)はがりこそ、

たかきやにのほりて見ればけふりたつたみのかまとはにき
はひにけり、

にんとく天皇は、御くらゐを、うぢの王と、かたみにゆづりお

はしまし、しきゆづりまし／＼て、三とせすぎゆけども、つゐ
に御ゆつり、いやたゆみたま(8オ)はず、三年のみゆづりと
はこれなりけり、うぢの王、いたりいたれるおほんかしこさに
て、われとけをとめて、かみあがらせ給ひて、ゆづりなし、お
はしましければ、なをこのことをなげきまし／＼て、その御事
なかりけるを、くたらのそうにん、すめろぎの御相ましますと
(8ウ)て、もゝのつかさもろとも、しゐて、あまつひつき
つがせたてまつりけり、つねは、あめがしたのたみのさかへを、
いぶかしみおぼしめして、たかきやまにのぼり、よものたみの、
本のまゝ(9オ)(9ウ)

きつね 三

むばたまのよる、かう／＼となきとどろかず、きつねといふも
のこそ、ひさかたのあめの手もをよばぬ、かかる女のいろ、つ
くり出して、賢王のこゝろをも、おびやかして、世中に、弓や
なぐるの事、かしかましく、なしぬると、人の聞えさふらふ、
この絵(10オ)も、かのこだまの、たぐひにてや、さふらひけ
ん、わらはも又、そのおなじものにてこそと、おもひたまふ、
うそにてやあらん、こゝろもしらぬ、おぼつかなき、いでやと

うじの大とこ、たばかり、見まくほしく、折くこゝろにかゝり、さふらふと申せば、行て見よとて、まかでさせたまふ、よりく、東寺へ、まうでよ、ほ(10ウ)とけの道、聞さふらひなんと申せば、さらば、せじやうてふ、す行じやの、をこなふ法こそあれとて、おはしますわたり、ゆるされけり、よるは夜るもすがら、ひるはひめもす、こゝろうちすゑて、法のことおもふに、のちは、たよりえなんとするこゝろ、つきくかきけちて、まことのこゝろなん、見えきぬるは、あ(11オ)なあさまし、ほろこそなけれ、思ひかへしなん、夜もいたうふけて、ねも三つ四つならん、ひぢりつかれさせますにやとて、やをら、とりつきて、物すれば、ひぢりは、つかれぬものになん、女はひじりには、ちかづかざる事の、いましめ、あるよなれば、神のすがた、仙のたまもちて、用なき、いたはり、するものか(11ウ)なとて、すどりひきよせ、ふみかきてたべぬ、ふみの名を、玉つくりと、かき給ひしが、なに事ともしらず、よみく見れば、あはれにおかしき、文なりけり、つくくと、まもりあて、おもへば、こしかたの、春の空や、はなのにほひは、夢のうつゝに暮はて、うつろひはてよ、こゝちぼうくと、うちとろけぬれば、まだ(12オ)おひもせぬ、おひらくこそ、き

たりけれ、

みつはくむならひのかれぬ世にしすめは老ならなくにおひらくのこし、

大徳返し、

老らくのこでもおひの身をえなはとこよや君かよとはなりなむ、

よくこそさとりつれ、なれば、女のひぢりなるべし、たとひ、いかなる、ちり(12ウ)になり行とも、そのこゝろかきけちぞとなんの給ふ、もてかえりて、まふでのほりて、ゑいりよ、うかゞひければ、きつねことかなひけるにやと、聞えさせおはしますに、文とりいだしたてまつりけり、いまよりは、ひじりよ、きつねには、あらぬぞと、あまつみけ、なゝめなりけり、日(13オ)もいくかならで、大とこ、まいりたまひけるに、なにがしのころは、きつね行て、大徳に、ふみかよせ、まひらせけるか、ひじりと名をあらため、おはすとて、文をもげさんにこそと、うちわらはせたまへば、君のみことは、くそく戒、たまちまさぬさへ侍り、ひどろは、さかの世に、いますときより、具戒の、し(13ウ)ろかたくこもりあて侍れば、なにとばけもて、せめさむらふとも、しろかたむけせんことは、かなひさふ

らふまじくや、たゞこゝろのさどきこそ、げに／＼しく侍るなり、すがたと歌とは、希有なる、夜刃羅刹なり、これは、かりていもといふ、鬼にてや侍るらんと、うちわらひたまふて、まかでまし、弟(14才)子たち、つどへて、わがまねして、じこいご、すぎやうじやのやどりへ、おになるれそ、もし入なば、ひと口にくはれなん、われは、牟尼のときより、ぐかいのこがうの、よろひきて、くはれぬなめり、(14ウ)

たまつくり物語 三 (題簽)

こたまの絵 四

九重の、にしの二条の、わらやの中に、をのゝ小町てふ、ばけものありて、いろ／＼しきをのこどもを、よな／＼ばかしぬるぞ、おそろしき、かぎりなりける、さるに、九条の東のかたはらに、ひじりいまそかりけり、すりき、けやけき人にて、此こだまを、ま(1才)ぢなひふせんとて、かの小町が、ばけて、をどこをなやましぬる、すがたをふでうるはしくかきて、歌よみて事つけてよと、おこせおはしけり、このひぢり、絵をもあてにかくひとにて、さかりなる、をとろへたる、あり／＼しく、

かきあらはし給ひける、例の法師の、たゞむぎ、ふりがほの、を(1ウ)しへの、おもはずなるや、われは、千世よろづ代も、かくてあるべきに、にくきにせぬのふるまひ、といひ／＼歌よみける、うつくしきをこのかほかたち、あてにきら／＼しく、かふりつき、なをしよそひ、みやびかなる、いとなをざりならで、おもふけはひの、さらに、うしろめたかる、い(2才)ろもなければ、なをうたがふならひの、つみふかき、わが心のおに、おそろしく、うちまもる、めも、たゆきほどなる、みやびするなかに、かき／＼くことの葉の、ふし／＼、よともにかはらし、かはりそといふ、まことしげなるを、いやいつはりとおもふは、あかぬおもひの、やぶさかふかき、むばらこ(2ウ)ろ、われながら、ものうく、こしかたゆくすゑ、いひかたらふ、ことの葉ぐさの、つま／＼つゆけく、しほれがちなるありさまは、神たえ、あめたふ、をのゝたかむらが、ふみかくふでも、をよびやはせむ、

いつはりのなき世なりせはいかばかり人のことの葉うれし(3才)からまし、

こひしき人は、いまやきまさん、こずしもやあらんと、おもひさだめぬ、うかれこゝろの、ちさとゆきかふ、たちてまつとも

なく、ゐてまつともなき、おもひは、何にたとふる、くるしきぞや、人こゝちさへなきをりからに、よやふけぬると、うちながむる、夕づくよのかげも、なゝめそらにはあ(3ウ)らぬに、ほと／＼となるつま戸、こはとうれしきの、さはきに、ものゝあやめもきゝわかぬを、もしやあだし人ならばと、心とりしつめ、たちよる、とほそも、ちよにものおもはれて、やをらひきあけ見れば、まちぬる人にざりけり、うれしどもそのことの葉やあらん、

まつよひのまたふけなくに(4オ)きみくれはゆめかあらぬかまほろしかみゆ、

けふの日のこよひは、かならずまでこんと、たのめしものから、をと／＼の目を、いつごろこんと、まちくらしして、きのふの日は、はやたのめし日の一よぞと、うつゝのゆめにまちくらし、あくる夜のながきあきの夜の、ちよや一よになりつらん、けさははや、(4ウ)この日なりけり、こはまだあらぬか、いかにこの日か、うちたどりたりて、ありしふみ、くりかへし、なをくりかへして、何のたがひもなきを、たどりうたがふ、ころまよひの、せんかたもなく、もだへくらしして、かどべにたゝずみ、とほそにたちそふ、うつし心は、さら／＼にしもなく、

(5オ)

君こすはねやへもいらしこむらさきわかもとゆひにしりはをくとも、

あからさまなる、をとこのおもかげ、たちそひ、たちそひて、こひしけれど、人めもる、世のならひ、くるしく、こゝろのみ、こがれもえて、たきぎよせなは、くゆりつくへく、おもひのほは、けたん水なく、かきひそめ、(5ウ)うちいさつるも、われながら、いたまし、きもゝ、いくづだにか、たちはてけん、かゝるせめは、たがせめぬるあたぞ、たれにせめられもて、かくなしみぬる、我こゝろのわがこゝろを、かりうちて、くるしかなしと、うちなげかする、このおそろしき、あたこゝろは、いづこよりこし、よしなき、すきこゝ(6オ)ろの、かきまねき、ひきよせて、なしなせるなり、あないぶせの、わが心や、かくはおもへども、なをやむべくもなく、もしはゆめにも見ば、しばしのわざも、とだえぬると、ころもうちかへして、あねたる、

いとせめてこひしきときはむはたまのよるのころもをかへし(6ウ)てそぬる

はしめには、こよなふおもひあひて、えならぬさまのしな、し

るすことの葉、急にかくかたちも、ふでもをよばぬ、たぐひな
るが、うき世中のならひかなしく、いつのほどにか、きりの一
葉のをちそむる空となりて、たゞとをざかりに、とをざかりは
てて、をとづれの風のたよりの、ふ(7オ)きかよふくもぢだ
に、うきたつそらのあとたえて、ひとりまろねのこのうへに、
はらはぬちりとともに、うちねたる、

たまくらのすきまのかせもつらかりき身はならはしの物に
そありける、

われはおもひて、ことの葉くさのすゑ／＼に、むすびをく露の
(7ウ)なさけも、かゝりけるよと、たのみおもへど、人はあ
かぬほどこそ、さはいへど、こゝらちぎりをき、ちはやふる神
かけてまで、いひつる事も、あとかたもなく、うちわすれて、
をりにふれ、とひくるなさけはあれど、ありしこゝろの、みや
びけは、いとすゝき、まそすゝき、お花がすへの、露もなく、
たゞしらず(8オ)しられぬ人の、よりきて、ものらふはがり
の中となりて、それさへうきに、をとづれもなを、みな月ごろ
の、かけひの水の、たえ／＼に、そなたのかたのみ、うちなが
めて、せんすべなみの、うらみに、身ひとりこがれたる、
ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふな

りけ(8ウ)り、

いろのさかりは、三のいつ／＼、二の八つ、二の九つ、それさへ、
すぎぬれば、あひらかなるも、いざよひの月、かけゆくに、ま
して、まゆずみふとく、かきなすま／＼に、のちはあらすみたち
ゆくまに／＼、にほのうみならぬ、ひたひにしも、さどなみよ
せて、こはいかにおどろくだにあるを、せんげんこまやかな
る、急さんの(9オ)いろのなかに、みなれぬ、しもをく、え
もきひとすぢ、こはさんぜんさく、いとよやならん、あなあさ
まし、と、うちひそめとも、われのみかくかは、よの中みなか
れば、なげきぬる、かひこそなけれ、

ふきむすふ風はむかしの秋なからありしにもぬ袖のつゆ

(9ウ)かな、

本ノマ、
身まかりたる女の、野ばらにふして、はれたどれ、いぬくらゐ、
からすはみて、目のたまはぬけて、あとはほらのごと、うそ
／＼、うさ／＼、かゝるなかより、うぢといふむし、むらがり
いで、わきあがりて、あをきはひ、つどひとびて、ふきわたる風
は、ちあよみ、もよあよみのつかまで、むせたぐり(10オ)す
る、くさき香、さそふ、いかなる、もろこしの、せいしといふ
とも、かゝらば、かゝらんかばねに、たれか、ちどのこがねす

てなむや、

あはれなりわか身のはてやあさみとりつゝには野辺のかす

みとおもへは、

ひぢりの人、みちびく、方便のにせよ、何のいかめしき事とも
の(10ウ)こと、おもひく歌よみけるを、よみくぬるまゝ
に、そのごとはり、むねにしみもて、とみに心つきはて、おも
ひあはせ、おもひあたれは、むまれこし、わか身は、まだはた
ちのとしだにこねど、百とせの、うばとなりたる、こゝちこそ
すれ、あなあだや、何のすがたの人のこゝろまどはすらん、大
徳(11オ)はひぢりの人なり、玉造の名、いまこそおもひ得て、
さふらへ、われつゝに、玉つくりのほとりに、露なしなん、ひ
さかたの、あめのくたさぬ、つゆの身やあらん、そのはじめの
さだめは、ほとけもたかへたまふ事かたし、人のたばかりい
かにをよひなん、たもとにまかせて、まかりて、御まへに、す
(11ウ)べり見えたてまつるを、はやみこゝろつかせおはしま
して、なれが、あやしきけはひいかなるらん、いぶかしきけは、
ものもふすほしみやとなん、おほせことこそあれ、をがみなが
らとりいで、たてまつりければ、此あやしう、たゝなるふでの、
たくみ、よの人のかきなす、かぎりにはあらず、れいの大とこ

の、わざ(12オ)にこそはあらめ、こはなに、なれが心ひとつ
を、さとりねとやはおもはん、あれも見て、おもひしれとこそ、
かきましつらめ、いましこそ、さとからめ、はやからめ、大と
このをしへうけずは、をもなからまし、一とき二時、うちま
もらへおはしまして、たちがたきは、此事にかぎり、いやあだ
なるは、このことにかぎ(12ウ)りぬ、仏のみでし、四しなわ
かちますに、びくなるは、舍利弗、びくなるは、けふどんみ、
うばそくなるは、はしのく王、うはいなるは、勝まん夫人、ち
からのけなるは、いゑにありて、此ことたちははずして、よこ
しまなるをのみいましめます、ちからをとれるは、家をいて、
みなたゝせまず、げにゆへあるにあらず(13オ)や、みなたち
ぬるは、かたきにてやすく、たちははずありて、あらさらん
のみたつは、やすきにて、かたかりけり、なれがはなのすが
た、月のをもづら、やゝもすれば、人のけ、うごかし、心をや
みぢにいざなふ、くにかたふげがちなる、こゝろくるしきを、
君の道、うしなひてんやと、あやぶみおもへるふで(13ウ)の、
たばかりにこそあらめ、此あとはよゝのをもかるたかななるべ
し、かなをかこそ、世になりきこゆる、てたれなるべし、はや
もめせ、御前すべりさがりて、少納言むかへて、陣の座へつけ

て、いまはもふで、まひるやらん、いかなるさますらんと本のまゝ舎よりしのび清冷殿ににて、みすのひまもとめ(14オ)見をる、なをしよしありて、かふりしなある、すどりならん、玉手ばこかゝへ、みやびなる、みはしのほる、又みやびなり、大ゆかためらひ、入つかふまつりぬべし、もうしのぼりのぢじう、みとりつきはてゝ、ありし絵は、とどめられて、歌のみたまはりぬ、かゝる歌のこゝろ、絵にゑかきなせと、たまはりけるまゝに、(14ウ)ながめやりて、おぼつかなげもなし、からぎぬ一まきとりしたゝめ、ふでうちそむるより、そのこゝろ、みなそのことなりけらし、かほもすがたも、さながら女のけはひしるく、こがねのひち、しろかねのふに、しろぎ、あけなる、みどりなるふに、あしたのきり、ゆふべのくも、見るがうちにをこりふるふ(15オ)ほどに、あらはれて、むまのふたつより、ひづしのひとつに、まきなりぬ、たてまつりけるに、引あはせさせます、ひとつしなにかなひ、ことなるさまにわかれ、かけたるあれば、又くはへたるあり、もろともに、神のいきをひありて、妙なるつきぬべきかは、人／＼いへる、かなをかこそ、ふしぎのものなれ、ゑかき絵かくま(15ウ)まに、僊人のじゆつさととりて、そのよそぢあまりなりし身の、とみにはたちばか

りの、かほかたちして、もよとせへても、見あらしといふなる、げにはたちばかりにそ見ゆる、のちのことしらまほし、はやなりはべりければ、歌かゝせ給ふ、ふでのくま／＼、たつのわだかまる、水とりのうかべる、たま引つ(16オ)らね、いとくりかけたる、文字のくま、絵のくま、くまたゝかひて、さらにかちまけなし、くにのたからは何ぞや、ものゝ、てたれなるべし、てたれの手にかゝりてこそ、ものいさをしをなせ、いさをしいちしるき時こそ、人もうごきて、よき道にも入なれ、空海のをしへ、小町が歌、金岡がゑ、逸勢が筆、(16ウ)人の見る事、御ゆるしありければ、見る人、いろに入、それよりたえに入、つゐにまことにあるなん、おほかるを、なをおほんおほへも、をろそかならで、みやづかへ、みこゝろにかなへば、かみのせんし給りなん、おほせことかたじけなかるを、もゝつかさは、下なるぞよき、人の上にありては、人め(17オ)ける心やしなん、わがかみにさふらふ、人おほかる、したがひ、うやまひ、なを下なるにゆづり、うや／＼しかるぞ、つゝしむきはも、こゝろよからめ、人のたのしひぬるは、いとたけよりも、そのふし／＼たがはで、うやまひ、ゆづりて、うちやはらぐや、なをげにしたはしからん、をとこそ、とこあれば、つかさ(17ウ)たか

く、まつりことの人のかずにもありて、世をたすけ、人をやすからせんとて、たかきにいたりても、よろしうこそさふらへ、女のたかゝらんは、たゞ女わらはの中に、たとはれぬる、をのがつかさに、ふけるこゝろよしとや、世のため、人のため、何のいかめしからん、人をかみにあがめて、その人にまかせ、(18オ)われは下にはべりて、わがをろかなるこゝろもちひぬや、身もあやうからず、心もこゝろよからん、あながちに、しりへすべり、つかふまつれば、さらばすけなれとて、たまはりつ、をどこたちの上おもへば、とこある雲客の、ひきかるは、世のためこそおしけれ、身のためは、さぞたのしかるらん、さらばうらみた(18ウ)てまつる事やはあらん、とこなき人の、下にはべりて、上をうらみまひらする、こはそも、いかなる、ことはりしらぬ、心なるらん、かみにありて、何のめでたき、世のためせん、きけば、をまなしとこそいへ、とこなくして、おほけなき、たかきくらゐは、位けがし、つかさけがして、それこそをもなかるべ(19オ)き、しかあるのみかは、君をも人しりまさぬ、おほんことになしたてまつり、身をも身しらぬ、ひとゝなりて、こゝろある人に、まゆひそめられて、何かせん、孔子もうじなどいへるひちりの、いやしかりし、げに世のために

は、王侯をも、いなみたまはじ、身のためには、何のうき事かおほしけん、何の(19ウ)はちしろひをか、なやみ給ひけん、かゝるひぢりさへ、みだりのくらゐならぬを、おもなしとはしたまはず、よしやつかさくらゐは、とこならては、おほかたは、たのしむべきかは、いきてはわれも人も、あとかたもなき、夢のあひたの、いきほひ、まかりては、きのふのゆめの、こがねならん、このこがねえたりとも、花につちかふ、つち(20オ)くれにもあたらず、

くらゐ山のほるとてもやすらはしせめてよもきのしまならばかは、

孟子てふ、ひぢりのまなびと、ふみちと、の給へる、此ひとことこそ、はかせの道、みなをこしたるなるべし、いかなるひぢりのかぎりにて、かゝることの葉、ときいだしけん、などとは、(20ウ)なみ／＼にも見るらん、こゝろほど、よそへはなれやすく、ことにのりやすきものはなきなめり、われなうさ／＼かきしめ、ひきとどむるに、君の御おほへよきとて、やゝするのりたてまつる、ないしがほ、たがためにいづるやらんと、わが心の、我こゝろをわらへば、うちわらはれて、しほれずは(21オ)あらで、はせつくるもののけがれの、これよりけなる、あ

りぬべしともおもほへず、ものたてまつるしな、のりにかなひ、
さまふしにあたりて、にくからぬやとうちゑませ給へば、はや
はなれてよかりし、しなのりこえぬべく、よかりしさま、ふし
はづれぬべし、にくきこゝろのはたらきよと、(21ウ)つえも
たげてうてば、やゝしづまりて、かしこまる、仏のぜんな、と
き給へるは、このはなたるを、つなぐのりとこそきけ、事にふ
れ、折にあふことに、心をまもらへ、目をいなづまの、ひかり
すぎぬる間も、はなたずしもあらずは、はやはなれつべし、も
ろこしより、よるひかる玉とて、まてに(22オ)かくるゝほど
の、うるはしき、たてまつりし、御まへにありし、何となくう
ち見つれば、はやはなれて玉いだくなる、せんすべなみの、も
てあつかへる、ことほりおもへば、此たま、つちくれにまさり
がほなきをと、これにても、はなれこゝろの、すぎまなきしり
ぬべし、つねにひだりに、さかほと(22ウ)け、みぎりに、も
うかひぢりを、やとひをきて、まもらせたてまつらばかは、は
なれざるべき、とこの心づかひをや、すぎやうとはいふならん、
いろによる、たからにむかふ、たときにのぼる、いやしきにく
だる、ほめられ、そしらる、かれに、これに、みなはなれぬべ
し、つゝしみなをつゝしみてこそ、しつめめ、(23オ)おなじ

ことのたまへども、ひとりをつゝしむとは、孔子ひぢりのみこ
と、こゝろをはなつとは、もふじひぢりのみこと、ひとりをつ
ゝしむとは、くびりたれども、しめず、こゝろをはなつとは、
ひきくびりて、かきしめたり、性善とかいへるも、くびりてし
たるなり、ひぢりはおほかれども、堯舜禹の三(23ウ)たりは、
いまそかれども、こうしいまいまさずは、つたはらじ、孔子い
まいましぬれども、孟子いまさずは、をこらじ、性善をみとし、
慎独をかわとし、放心を緒として、ふくろしたてゝ、とこに、
わがひぢのへに、をかばや、ねがへくど、ふくろもなし、ふ
くろなくは、すけもあたらす、しきもふしして、(24オ)かへ
しまひらせて、くらんどばらに、をりあて、のちすこし、こゝ
ろやすかるけぞあめる、(24ウ)

たまつくり物語 四 (題簽)

きのふのゆめ 五

きのふの夢の、さめて、あとかたなきは、とめるを見たと、
まどしきを見し、おなじあだしことなりけり、人のうまれて、
かぞいろのよろこび、いはひこと、引つくるひ給ふは、身まか

りて、むまごの、なげき、おくること、いとなむ、いくらばかり
のほどかはある、わがいとけなく、はひそめし、きのふ(1オ)
より、けふしもはひぬる、これこそかはりにけれとはなくて、
あすはひぬる、手のさしいだす、あしのひきはこびぬる、おと
ゝひよりも、につかはしく見ゆるこそ、日ごとく、身のかは
りゆく、うつろひの、はこびなりけれ、はも、ひとつふたつお
へそむる、これなんおひらくのきて、つきくかけゆくへきは
じめなるを、あかきかみの、みどりのいろこそ、まさ(1ウ)
りゆけと、よろこぶは、はやみとりのかみの、うちしらけて、
おひのうれへのいろを、あらはしそむるなり、むまるゝも、し
ぬるも、ひととなりぬるも、おひぬるも、よの中のよのつねぞ
かし、つねなるは、何事をかは、よろこび、うれへ、さふらは
ん、よろこぶましきを、よろこひぬる、こゝろより、うれへま
しきをこそ、うれへさむらへ、月いとあかく、(2オ)かどみ、
みがけるが、花のえだにかゝりなから、そでにとままりけりと、
見しよの夢のしるし、あだならで、たゝならぬ身となりて、月
のことせしひめ、うまれけり、おさなきけもあやしう、みやび
かなりと、かきつけ給へる、はゝきみの、御水ぐきのあと、そ
のよろこび、おはせし、いま見るごとくに、あはれに、かなし

うぞ、あなる、たらちめのゆめよ(2ウ)り、われうまれいで
ゝ、いとけなき夢、はやさめければ、いまさかりなるも、やが
てのゆめなるへし、おとろへ身まかりては、夢のこの身、きえ
うせて、ゆめの世に、ゆめの名そ、のこらまし、わがかずなら
ぬ、女はらはのみ、かゝるかは、ほしのくらゐ、竹のそのふよ
り、はこやの山、あまつひつぎの御うへまでも、さらぬやはあ
る、まどしく、くるしむも、夢にし(3オ)あれば、おごり、
たのしみぬる、うつゝとやはいはむ、おなじ名、のこりとどま
りなは、きたなき名の、よゝをけがしぬるは、うたてき、よき
名の、人ゝを、きよむるこそ、とりもとむるにはあらで、人
とむまれこし、つとめなるべけれ、こゝろのきよきより、わざ
のきよきはいでゝ、その名をきよくするを、こゝろきたなり、
わざきたなくして、名の(3ウ)みきよからんとするぞ、おろ
かなる、ひとゝの、まよひこゝろの、おもほえなる、身をま
げて、かげをなをくせんと、おもひくるしむ、たぐひなるへし、
その、こゝろをきよめ、わざをきよむる、何のかたきことか、
さふらはん、たど、むさほり、おごるあだしゆめこゝろもひと
つを、かきさまし、ふりすてぬる、のみなり、いでや、すぎこ
し夢しるさん、おさ(4オ)なかりしこゝろ、にはのさくららの、

ちりはてたるを、

さくら花散にし夢をうち返し又来ん春も見なんとすらむ、

(4ウ)

ならひに

仁王会

いつれのみやらかにか、おはしぬらん、どうぢやうひきかざり
て、中には、さかほとけの、みかけ、かゝらせ給ふ、ひたりに
は、おそろしき、みすかた、五尊かけたてまつるは、五大力ほ
さつとこそいへれ、みぎりには、くはむおん、ふげむ、もんず、
さりほつ、はしのく、かゝります、ほんわう、たいさく、四王、
みきりのつぎ、(5オ)ひたりのつぎ、つぎく、くらゐく、な
りけり、みまへには、もゝのともし火、こがねのともしに、とも
したて、もゝのかうろに、はくはかう、たきくゆらかし、百の
かめに、もゝいろのはな、たてならべ、かうじ、とくしのとこ、
むかひ、にしきのみはた、雲の上かよひわたるかせに、うちな
びき、らんじやのけふり、くもとたなびきかほる、もゝのつか
さくらゐ、おご(5ウ)そかになみ侍り、御僧たち、なみたち
て、おかみゐて、ぬかづく、いとしめやかにとうとし、みすの
わき、をしうごかして、かみすけてふ内侍、かひどりゆくしう、

裳のそば、とりつくろひ、はかま、ふみしたため、なよらにい
て、かゝけなせる、みやびかなり、上も、ほくめむせさせお
はしまして、玉のみかうろ、みづからさゝげ、みおかみ、信つ
くさせおはしますも、かた(6オ)しけなしや、れひ人太平ら
くそうし、御僧かだひく、かの天竺のうたうたふ、呂律とゝの
ほりて、にしのきはめの、四りんのれいがく、もろこしの三代
のれいがく、いま、うみのひんがし、わがすべらきのみまへに、
あつまりきたりて、きみのみとこの、いやめてたくぞ、わたら
せたまふ、身のけ、いよだつは、にんわうゑとぞ、いへる、此
御(6ウ)経は、くにもる経の名にたつを、そのことはり、と
きますをきけば、何事も、みなむなしきことゝ聞ゆ、いといぶ
かし、それさへに、なを、あめつちも、やけうせ、たかまがは
らも、わだづみのみやも、さきくさつきて、ほがらく、ほの
をとなりて、もえ、はいとなりてあがり、さかりなるものは、
かならすおとろへ、みのりたるものは、かな(7オ)らすうつ
けぬと、とき、此身も、たまの、かりにかたちちにのりて、かた
ちと、たまと、はやはなれなん、又くにに何のつねかあらん、
くにに何のたのみかあらん、ととく、国もる経に、くにのやふ
れなん事をとくは、いかにぞや、かくおもふに、又おもへば、

げにそのことはりこそあめれ、もろこしの、よゝのやぶれしを
とへは、そのはしめの君は、あるはひぢり、あるは(7ウ)かし
こきにて、身をあめつちのりにまかせ、さらにわれ心なく、
わたくし心なく、あめがしたも、われひとりのもよと、たの
みおもふころ、露まさねば、くにのうちのものたからも、た
みも、のりも、みなあめがしたのものにして、わがものにはあ
らず、せめつかひ、をしきためむ物かはと、ばんじやうの御身
も、ころは、ひとり身の、わか身のころちして、おさ(8オ)
めおはせしを、そのすゑのきみは、くには、いつもくわがく
に、我心のまゝに、むさぼりなん、たみは、つねにわがたみ、
わがころにまかせて、したがへてん、身もことはにながら
へ、くらのも、ながく君ならんとて、心のおもふままにのみ、ふ
るまひませは、やがて、くにやぶれけり、いまこの御経のこと
はりにまかせて、よくてらし見て、おごりたのしひて、さきく、
(8ウ)さかへんとすれば、とくおとろへ、こととゝのほり、
身みちなんとすれば、はやうつけ、からよき人と、たはれすぐ
れは、くにかたむぎ、みだれおこり、めづらのたから、しきた
くはへては、かならずわざはひきたる、さればぞや、玉のおん
なも、ながきいろなく、いつぞのまに、おひかしけ、めでのた

からも、うてばやぶれ、あたれば、くだけ、くにも、とれば、
そ(9オ)むぎ、たもてば、みだる、人も、つかへは、うらみ、
かれはかはり、わか身も、ふれははやおひ、わがいのちも、と
かくするまに、きえはてぬめり、つかさも、人にうつり、くら
るも、あだしにゆく、これよの中のつねなり、しめいひたのし
ひ、わが物てふもてあそふものなし、かくものゝことはり、さ
とりきはめまさは、なにのたからのむさぼりなん、何のいろの
うつけか(9ウ)あらん、くにのあらそひ、人のにくき、みな
つきはてて、なきときにこそ、国もゆたかに、あめかしたも、
おだやかならめ、げに国もる、みのり、これにすきたるはなし、
わがころにこしらへて、あめがしたたひらげ、くにおさめ、
いへとゝのへ、身やすからんとするは、よのつねの、よきのり
には、あなれど、そのこしらへむとする心に、はやわたくしそ
ひ(10オ)いて、したりがほのまつり事いできて、なすことな
う、をのづからなる道をうしなふ、このみちうしなへは、たみ
からきにくるしむ、たみくるしめは、くにやぶる、たゞたのし
みなく、たしみなうして、をのづからなす事なう、をのづから
なる、ことはりにかなひ、さてなん、くにおさめ、あめがし
た、たひらかなれるこそ、まことの道ならめ、かく物して、

(10ウ) わか身おさまり、ことなうして、まへを、はづかしめ
まぎず、のちを、みちかくし給はぶ、などくにもるみのりと、
いはざらむ、この御経こそ、うへもなく、あたへもしらぬ、た
からなるへけれ、御経こうじをはりて、小町におほせて、三ほ
うにたてまつります、かくにあはする歌、たてまつれとあれば、
よみてたてまつりける、(11オ)

よの中は 何かつねなる あたしもの ひさかたの あめ
もやふれて ちりぬれは あらかねの つちもくたけて
うせぬめり をはりには ほからにもえて あともなし
そめいろも わたつみもえ はいとなり ひさかたも
たつのみやこも さきつきて おにかみも いつれのみや
を たのしまむ 人のくに なにつねならん たのみなし
(11ウ) うまれては ゆめのまにこそ おひにけれ や
ましきは くるしむ程に しぬるめり あることは もと
をとむれは なぎにぬぬ さかりなる ものはおとろへ
かなすなし さねなるは かならすむなし かたきなし
むなしきを さとりさとれば われもなし よの中に こ
ゝろとまらす こゝろなし たしみなく むさほりもなく
なすもなし(12オ) きみは君 人はひとにて あるまゝ

に まことにて たゞしくなをく あきらかに あめかし
た おさめ給へる すめみかと くにあかた たもちます
なる まふきみも そのいへを とゝのへおしふ もろ
君も 身をのみに おさめぬるてふ 人もみな しなく
に 身をまかせつゝ こともなく いつはりの こゝろふ
りすて まめにして(12ウ) まこしまの 心をよきて
まさしくて たりぬしり むさほらなくに きよかるや
へつらひも おこりもなくて つゝしみて 身とこゝろ
きよくたゞしく うつくしく なにことも のりにまかせ
て よをへつゝ 身をおさめ 心おさまり すきゆけは
かみつ人 やはらきますや をのつから しもつひと む
つましくして とことはに(13オ) 世中こそはおさまり
ぬめれ

返し歌

世中はむなしとすてゝたのしまぬこゝろやくにをまもる成
らむ(13ウ)

玉つくり物語 五 (題簽)

すきくるま 六

御位月日とともにおはしませど、あやしのしづのお、しづのめが、ねがひたてまつる、おとまでも、やむ日もなきに、いかなる御はからひにか、御ゆずりの事さだまりて、われもかんだちめのなかに侍りて、あさな夕な御ほとりもさりあへぬが、折くあ(1オ)かぬ御けしき、ことのはしくに見えさせおはしませば、こゝろくるしう、おもひなやみて、いかゞはして、御けをも、もどかずして御こゝろもしめ引まさぬさまに、なり行方のなからめやど、とにかくにおもふ物から、かなたこなたに、ものもふでによせて、里をりがちなるも、人のまゆひく、なかだちにこそあめ(1ウ)れ、くるまのものみは、すだれいとうすく、あみかけつれば、そとより見るに、かくるゝきぬの、あやもなうぞすきとをりける、ゆきあふ人く、ひとりふたり見そむるを、かぎりよ、かゝるすき物こそあれ、よにものみせば、此くるまの内よと、すき人の心み、かどく／＼にわらはをこせ、まもらせて、(2オ)見もしきかせもして、さきへさへぎり、かいま見しぬるも、物はかなう、こゝろあさしや、人はわ

がすがたを見れば、われはひとの心みな見つ、今殿上に、有職かほつくり、衣冠ひきつくるひ、なを学問のつとめ、めでたふなど聞えて、しろかにゑめける、わがすきぐるまのうちより、こゝろの見えぬ(2ウ)人もなかりけり、目の見る、ゆびのさす、ふるきふみに、あくまで、書おきけるを、六条のわろきみ、みなもとたまはらせ給ひて、めでたく、とみさかへたまひけり、いとさときざえ、おはして、はかせのみち、ひろくまなびて、わが身かしこきに入りけり、おほかたの人とは見え給はぬを、かほにしも(3オ)ある事は、はらにはなきを、されど、見てこそしらめ、夕まぐれの、月またをそきに、山のは、いつしろからんと、ひとりまぢるのはしるする、いさゝかこびなして、まほにくるしき、いろ見えますは、月かあらぬかうちさしめ、うちすぎて、又かへるさに、はかまあたりぬべく、すぎなんとすれば、そで引とめて、はや(3ウ)こゝろは、うき雲の、なを上ゆく空の、いろぞ見えける、かくて、みだれく／＼て、ふみをこせ給ふ、

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにしわれならなくに、
すぎがてら、

みちのくのしのふもちすりたれゆへもみたれそむへきもの
(4オ)ならなくに、

人や見るらんとひきわかれぬ、むかしたいわうともうせしきみ、
いろこのみの、やまひおはせしを、人にくみまいらせざりけり
となん、おなじこゝろなりや、このとをるの君は、うたまくら
すきたまへり、河原の院とて、ちかのしほがまの、けなる山、
をかしき水、こしらへませりけり、江(4ウ)をかこひ、辺に
そびへて、あやしき、山のすがた、そかひより入、くまにたよ
ゆる、ことなるうみのさま、こゝにうつりこさせて、石のたよ
ならぬ、くにくより、あつめて、たよみあげ、つきあげて、
からやまとの、こだちこびなる花、えむなる木うへ、さぶれい
しの、いろおほき、うらくよりはこびて、ふかきに、(5オ)
しき、はまに、しき、かめのへたる、うをおひたる、はなち
て、かもめ、をしかも、水にうかび、ましら、をしか、おのへ
になく、やそのつりぶね、しまにかくれ、くまにあらはれ、あ
ひきするあみ、なよめなるかげにほし、つりするさほ、をちた
る月にたる、なには江のうしほ、くみあげて、しほまき、しほ
たれ、(5ウ)しほやく、しほがまは、ならせるはまの、とあ
るかた、かくあるほとりに、たてて、もしほのけふり、かすみ

をすき、雲にあへる雲の上人、折にふれたる、えんにのぞみ
て、うたひ、たはれて、いくちどのさと、いくよろづのほど、
とをつへだてし、みちのくのくま、都のうちにあたとり(6オ)
て、見るけをのばへ、目をよろこばせぬやはある、から国の文
王とやらむ申すわうきみ、つき給ひし山、ほりませしぬま、お
なじきや、ことなりや、つかさたまはる人の、かしこきまなぶ
のみ、かふりとおもへば、ろぢんのみちまなぶ法師も、かくぞ
ありける、この人比丘なりけり、ちゑ(6ウ)ふかく、みちさ
とりけりとときく、かうぶく寺、東大寺の上人たち、かうの衣の
とふとげなるきて、もくれん、さりほつかほつくりたる、こび
たるめくばせ、ひとたびうちして、はや心まとはぬ人こそなけ
れ、わがすきぐるまのうちより、心のくま見るとはしらで、い
まだならはぬ、や(7オ)まとうたに、かたはらいたきふしよ
みそゆる、具足戒たもちて、三世の仏に、かたくもうしちぎり、
戒もるあまつかみ、おどろかしてこそ、うけけめ、あだなるは
なのいろの、露のまの、ゆめのたはれに、ながきよの夢、さめ
たる、又ながきゆめ路に入むとや、僧は、たがやしやはする、
たくみつとむるかは、(7ウ)たゞどうとこ、身をおさめ、よ
の師となりもて、世をたすくる人ならずや、わがくるまのうち

ならでも、人のこゝろは見えぬべし、いかる心のひさしからば、むさぼるこゝろも、おほからん、人をふかくうらむる人は、恋するうれへも、ふかくこそあらめ、あぢはひたしまば、いろをもこのみなん、さ(8オ)がなき心、一かたのはしにあらはれなば、千々のはしにかくれこもれる、いとゆるし、つかさたまはる人と、法師とおなしからん、むさぼる心あれば、わたくしすることしるく、人そねむけのあるは、さがしらすにさだまりぬ、ことひきつくるふいろの見ゆるに、いつはりあざむかざるはなし、(8ウ)いろこのむ人は、しろかたむくる事あきらかなり、かゝる人まつりごとせば、よきことやあらむ、法師もるんよくたゞざれば、よろづのよくきそひ、しんゐつぎざれば、もゝのよこしまある、みなかゞみにかけたるなり、ろうゐんおかす法師の、ひゐんおかさぬはなく、ちごのいろにふける身の、(9オ)ほうゐんにきよきは有べき、大ひえの大とこ、から国にゆきて、ととせあまり三とせ、がくもんしてかへりおはせしに、でしたちの中に、在五の君の、うつくしきみかほを、こゝろよげに、ひと目見たるを、みつげ給ひて、あのほうし、山ををひおろしてよ、とをくは、三世のほとけの、天眼も(9ウ)て、まもりつめ給ふをもおそれず、ちかくは、ひ

どうが、見るをもはぢず、美児のかほ見たるは、此法師こそ、一定ひゐんおかしぬべき、くせものよ、山にひとり、ふぢやうのものあれば、みなそれにたぐひぬるなり、先師さいてうあざり、定に入て、たちて、なみだをながし、しやうとく太子の(10オ)七百さいの記文は、こと山よりはいでし、わが山よりこそいでめとて、かぎりなくなげき給へる、此ほうしこそ、そのきざしよ、とく／＼とて、山をこそ、いだされつれ、君はおとこの身にて、女のすがたなり、男の女とこそいはめ、けつかひの地、やぶれなん、かさねては、のぼりますな、との給へば、
在五の君、(10ウ)

大ひえのかけひの水のきよかるもいく世なかれてすみははつへき、

大とこ返し、

なかれてはにこらん水もわか柚にわかつほとはすまざ

らめや、

しか／＼ときよて、よみてやる、

すむはよきひよしの川の(11オ)しかはあれといろくつす

まぬなかれとやならん、

きこえぬる美人の返しは、せぬことよて、返しもしたまはねば、

又

日吉川なかれのすゑはにこるともみなかみすまは水は絶せし、

かくきこえけれども、なをかへしはなかりけり、東寺の大とこに、おとらぬ大とこなりけり、いかなるこだまも、(11ウ)かゝる法師にむかひては、たよりもとむるひまもなく、心ひき見んよすがもなくや、よしみねの少将と、きこえしは、少年よにすぐれたる、せむげんなりし、けさうするたぐひこそ、おほかめれ、歌もあやしうよみ、いろこのみのしなも、なさけふかき、きはなりし、院の御いつくしみ(12オ)ふかきを、わすれかねまいらせて、ことみよに、つかへ奉らんことを、はじしるひ、ふるくさかぎりのみゆきのぐぶし奉りし、そこに、かしらおろし、ゆきがたさへ、人しらず、こゝろざしいとふかきを、きみもあはれにおぼして、さま／＼たづねさせたまひけれど、しれる人もなかりけり、きよみ(12ウ)つにもふで、さかのぼるとで、くるまのうちより見ければ、きれたる、みの、やぶれたるかき、きたる、しやうすいなぞへなき、ものゝしかすか、けたかうたゞならぬすがたの、いつこのやらん、見つるけのすは、少将のなれるはてにやと、たどるまでもなければ、

いわの上にしたひねをすれば(13オ)いとさふしこけのころもをわれにかさなん、

すどり、うちぐもりそへてやりける、

よをいとふこけの衣はたゝひとへかさねはつらしいさふたりねん、

なはかしの御房へこそ入せ給へ、ありしくものうへのふるきものがたりせんと、ちぎりもて、くるまゆきす(13ウ)きけるが、かゝるけなるけのものに、かしこそせめ、その法師、なにがしぞ、とらへてよと、さふらひ、ふたり三たり、かへしければ、はやかきけちけり、ゆくゑをしくるめ、もとむれどもなし、ゑんちん大とこに、まなびけるとなん、こほりのけ、いわの心、すぐれたるなり、北僧(14オ)のきよき、南法師のきたなき、何の故ぞとおもへば、よき人の、とをきちかきによれるなるべし、南法師は、行基ほさつ、らうべんそうじやうなどいへる人に、とをかれば、心たゆみたるならん、北僧は、さいてう阿ざり、ちかくは、ゑんにぜんじ、ゑんちんあざり、今いまそかりければ、なるべし、(14ウ)人の心は、ことの葉にても、しるるならん、わがかくものもうでするを、にくみいふ人もありけり、かゝるとがも、君のみてうのふかさのゆるしますなりと

ぞいふめる、これはなれが、おぼれこゝろに、まどはされて、
おもふ人のとが、ゆるすなるこゝろに、いへるなりけり、きみ
は、人のこゝ(15オ)ろの、み心ふかく、わたらせ給ふや、め
でたきみこゝろのみ、おはします、さらでも人のとが、せめさ
せたまふことにむかはせ給はず、なをわがたちの、あやしき
を、めでおはさしの、御つゝしみあつくさむらはせ給ひて、や
ゝするかたむきがちなるを、うむじおぼして、よしや、あらぬ
ことに(15ウ)もなれよかしと、おほしすてさせたまふる身を、
それより、かゝるをばしらで、いひけがしたてまつるなり、ね
たみこゝろさがなく、ふけりこゝろの、きたなきこゝちより、
かゝることの葉、おいてゝ、(16オ)、(16ウ)

井に
たかのやま 六

たかの山の、いくゑのくもきり、へだてさりて、五十六億万歳
のとき、みろくともふすほとけの、よにいでさせ給はんを、
まちおはすと聞えし人こそ、まめに、こゝろきよき人なりけれ、
はつかあまりひと日ふつか、おほんそぼ、はなれず侍りて、身
をくだきたほらかし、心をひきみ、(17オ)さふらひけれども、
露うごきたまはず、からくにの、いるん、はくい、りうかけい、

孔子、よたりのひじりのなかに、ひとりなりける、となりの人
のめと、一夜おなしとこして、心みだれざるを、よになき事に、
いひつたへたるなん、おもひさふらふに、その女は、しづがめ
にしもあるが、それにあはせて、さがなき心にもありけり、わ
がおとこならぬ、おとこ(17ウ)のふところに、をし入しおも
へば、つたなき心になぞへて、かたちもさこそありけめ、それ
にさへ、心みだれずとて、いかめしき、ふでのあとにしも、の
こりけるを、わがあやしき、こだますがたの、ひとめ見るにだ
に、たえしのふ人はなきを、いかに、ゆめうごきまさぬ、こゝ
ろなりけん、此ひとつの、ふかく、おもかる、ねなる、もとな
る、さへ、なきこゝろに、何の(18オ)すゑの葉の、かるく、
あさき、むさぼりの、おはしなん、むさぼりてふ、ことなかり
ければ、心のひかりけち、身の道まげぬる、あまりあまる、こ
とくくの、きたなき、ふしあるべきかは、かゝる人こそ、世に
もちのまさば、世のたからならめ、かのためし、このためし、
おもひあはせぬれば、仏の道と、はかせのみちと、やすき、か
たき、かはりめや、ありけん、又よたりにならべる、あめ(18
ウ)のなせる、きよきけにや、おはしけん、しらず、ひごろ
くは、ひとりといふとも、わがたほらかしに、したがはずや

はあらんとこそ、おもひ給ひつれ、この大とこに、むかひてこそ、をよばざるさかひ、ありけりとは、はつにしりつれ、されば、かれにもかなはずこそあらめ、ものゝおくは、なきものなりや、ちかづきそめ、たてまつりしはじめより、かたはらにさふらひながら、いとちかづきがて(19オ)にのみ、おもほへしが、いや日にまさり、けどをく、のちは、ものらひさへ、なをかたかりし、これよりほとけの道の、たうときかぎり、はかりしられて、めでたかりし、されども、おしき事こそあなれ、かゝる人して、世のまつりごと、しらしめたてまつりて、とうぐのみよ、いま見ばやとのみ、おもはれつる、ふみかくみちも、あやしう、手かくみち、よをたえたる、とにかくに、はかり(19ウ)がての人なりけり、三がうのしき、といへるふみこそ、よにをかしけれ、そうじといひし人の、ぐうげんといへる、手だてもふけたるを、かりもて、心はそれにあらず、りうはく倫といひし人の、ひぢり、かしこき、ほめたる、ふみのいきをひによせて、こと又ことなり、かゝるふみかくことかたし、はかせのおしへ、道のおしへ、ほとけの教道、あげつらひたるならし、(20オ)いまのはかせたちは、この法師ことわりなき事、かけりといへど、それはわかひとへこゝろ、あだ心の、きそひ

にて、ものゝことはり、ことのとこに、ひきあはせもて、よくしらぬなりけり、しかはあれど、またからくにの人にもありけり、かんたいしといへるは、世をたえたる、ふみつくりなり、仏の教へ、道のおしへ、あながちに、そしり、やらひけり、ほとけのおしへ、あだ(20ウ)しことならましかば、いかでか、月のくにおこりて、ほしのくに、をしかたむけ、なをわか目のくに、をしなびかしなん、いかになを、らうし、とかもうすひぢり、わが師なり、との給はん、また道のおしへ、いつはりにしあらば、孔子、ともふせしひじり、何かはあながちに、師としつかへて、道はをこなひがたきと、うむし、なをたつなりけりとまで、おそれたまはん、(21オ)かの師のせいには、ちやうかうといふ、しちやうといふ、おなじさまにはいへれど、そのつかへますさまこそ、くもと、ひちとのたがひなりけれ、そのたがひをも、しらざりけるや、かきなすふみのしなにも、をしてこぼみいへるけ見えて、そのわたくし心、そははづかし、かのかん退し、周公のざえありとも、かゝるわたくしもて、まつりことせば、さぞひがめるよこしまや、おほからん、その世の(21ウ)君は、いとかしこくや、いまそかりし、そのざえのたかきにもめですて、まつりごときかせ給はざりけん、堯と舜

と禹と、人のあやうき心つきて、みちのかすかなる心、みななるもて、あめがしたおさめ給へる、あとをのべあかして、しうこうと、孔子と、もうじと、こゝろくまなく、身くまなきもて、ときかきましけるみのり、人の上のすぎたる、をよばざる、よぎて、中(22オ)なる、よろしき、かたおしへ、たまふなれば、君よりたみにならばざらめや、道のおしへは、ふきてふすめろきの、あめのことはりの、つちと人とをこめたる、やしなあるより、やつをやつ、なを六ある、やつのをつ、それより、しんのう、といへるすめろぎ、あめつち行めぐりて、そのしな、しりつくして、くすりの心しりて、なをくわうてい、ともふす、すめろぎ、あめつちのけの、のぼり(22ウ)くだり、人のけのともにくぐり、よきわざによく、あしきわざにあしく、すぎたるにつかれ、をよばざるにとどこほり、中なるにかなひ、きはめては、むなしきにみなかなひ、そのきはめたるはまことの人、つぎなるはいたれる人、そのつぎなるは、ひぢりの人、そのつぎなるは、かしこき人、くらゐくくに、をこなひきて、くらゐくくにけおさまり、身おさまり、いゑ、くに、あめがした、おさ(23オ)まり、いゑにありて、仙となり、いけるながらに、しんにいたる、こののりを、らうし、といへる、ひじり、さと

しえて、いたれるにいたり、まことなるにいたりて、のべきこえたるなり、まことののりにあらずは、かの神仙うなづきまさんや、仏の教へは、三の教え、とをのさかひをあかし、教へ給へるなり、三の教へとは、人天のおしへ、三乗の教へ、仏乗のおしへなり、十のさかひと(23ウ)は、ぢごく、がき、ちくしやう、にんげん、せんだう、天上、しやうもん、ゑんがく、ぼさち、ふとなり、にんでんの教へとは、六ののりをもて、六のさかひを道びく、いつくしみは、くにをうるほし、うやまひは、たみをとゝのへ、よきはめお、おやこ、いろへ、いろと、きみひと、そむくをたち、かなへるをたすけ、ものしるは、ことこのうへのことはりあきらめ、まことはまめにおさめ、とこ(24オ)は色もかもなくて、道にかなへるなり、このりおほひにかなへるは、天上となり、つぎにかなへるは仙人となり、つぎにかなへるは人間となり、おほいにそむきぬるは、ぢごくにをち、つぎにそむけるは、がきとなり、つぎにそむけるは、ちくしやうとむまる、三乗の教へは、みつのひじりをなす、大にさとりたるはぼさつ、つぎにさとりたるは、ゑんがく、つぎ(24ウ)にさとれるは、しやうもんなり、仏乗は、あまりなくさとれるなり、これをほとけと、なづけたてまつる、あめつち、いくた

びともなく、ひらけ、やぶれせし、その過し世、かずもなきさきより、ほとけ／＼いで、迦せう如来にいたり、いまはさかせそん、のちの世は、みろく、ぜんせいより、かずなきにゆく、あまつかみまもり、くにつかみたとび、わだづみうやまひ、鬼ばけもの(25オ)おそる、いたり／＼て、ふかゝらずは、かゝらめや、かくいへば、そのたぐひは、をのがじゝ、かたふどすること、われをも、かたふどするとや、おもはまし、われはさはかたふどするすべいさしらず、ほとけや、みちや、そしるは、うらめしからず、ことはりをすなんうらめし、又大とこほむる、大とこいとをしからず、にくからず、たゞきよきをほむるなめり、三かうのしき、又はか(25ウ)せと、みちと、仏と、あさきふかきをいへば、しんかくのかいに、何のたがひかあらんことや、あさきふかきをいへる、かならずある事をいへは、こはたゞしく、そはよこしまといふにはあらざらまし、月に三日月のほそう、弓はり月のなかばに、もち月のみちたるあり、そをそといふを、そならずとやいはん、しかいへるは、三日月は、月ならずといへるにやはあらん、此ふみは、あることを、ありの(26オ)まゝにいへる、みか月ほそし、弓はり月、なかばなり、もち月みちにたりといひさふらはむに、何のたがゝはさふらふ

べき、かのしんかくのかいは、三日月のみ、めでなめぬる人の、弓はり月をあやしめ、もち月をいとひもて、月ならずと、そしりねたみなんにおなしかるべし、さればぞや、らいきに、つまつきてふてとはせしてけり、これらうしとこ、けたかく、(26ウ)こうし、をのゝきふします、わがおもはく、まとはづれ、しけるなへに、こばみよぎたる、いとあかし、なをわが身を、孟荀にたぐひしていへる、荀子にはたぐひにもいりなん、孟子にはたどふべきかは、万丈の山を、一あよみ二あよみのほどをしも、のぼらなくに、いかにいひつるこゝろならむ、見るに孟子の経は、むねも、ことの葉も、みな神ひちりのけ、そのくま／＼、むさぼり(27オ)のけ、わたくしのけ、をぐるけ、へつらふけ、露さむらはず、しんかくのかいは、そのけ、みな、たゞ人、むさぼる、わたくし、をぐる、へつらふ、そのけ、まきのほかにや、あまるらん、ふみかく人の、もじきよらに、つらねなし、をもむぎ、一すぢかきながせれば、われも人も、はやよしとやすらん、などしも、ふみかく人の、ことの葉のうへ、ことはりのした、けてふものゝありて、此人はかみひ(27ウ)ぢり、さかしき人、たゞ人とし、あらはし見するをは、しらざるらん、このけは、いづこよりか、きぬらん、こゝろにあるも

のよ、ふでにうつりいづるなり、などかは、きりふくろをぬけ
ざらん、だるまとかや、いひしひぢりに、しう多き、ろろん、
しゆんじうを、見せたてまつりて、此経のこゝろ、いへく
せたげければ、はなこそかよひつれとて、まきとりあげて、う
ちかぎて、くびと(28オ)り、の給ひしとなん、これはけをや、
かぎたまひけん、またかの大とこのふみは、たゞ人のけなく、
ちりをはらひ、あかをふりすゝぎて、ことのはゝ花、こゝろは
実もてあそびぬる、あかぬなりけり、

又、 たかのやま高きこゝろにあいつたの五十六億万歳をまつ、

又、

世をしゐて世をもおさめて世に(28ウ)はなと世のともし

ひを世ゝにつたへぬ、

又うたふ

みのりにもかきりやあるらんきみにつかへほとけにつかへ

ひとつ身にしてふた世すくはぬ、

又うたひけり、

きみなしやわか身たえぬやおほつかな世をはおさめぬ、

又長歌、

おもへはことわりしるしよをおさめは(29オ) たゞわか

一よ しかあらは いかゝみのりの ともしひを いそち
余りの むつにして とをのよろつを よろつよむ とし
のかすには つたふへき かゝる心もて つかへなは な
とまつりこと しらざらん 君もませとも たゆれとも
さたまれるのりは いかゝせん よし何事も よの中は
おもふはかりは かなはさるものを(29ウ)

たまつくり物語 六 (題簽)

なそへなきはな 七

くもの上の、はるの日、いとどかに、くれがたふ、花のには
ひも、かほりすぎたるに、名にたちばなの、さきいでたるは、
いけのはちすの、あをみかへり、海棠のいますこし、あけのま
される、かきつばたの、なをこき、西王母が、そのふにさける、
(1オ) いやこがるゝ、八重九重、けなる、げにる物もなき、
これは、大真妃といふ、美人の、色によせて、あめより、さん
ろうの君に、たまひし、花の、いま此くにに、ながれたるが、
此はなは、はなよりことなるは、かの小町が、すがたに、合せて、
天こゝろしてこそ、人く、より見てよと、せち急にはあらぬ、

とよ(1ウ)のあかり、ゆゝしうぞおはしける、人／＼申せとおほせごと、かしこかれば、このはなは、いろはこびはさること、木だち花のこえたる、かるやかならず、この女の、うす物にだに、たえざるには、をよびがたしもふす、さらば過にし、まだしき、とり／＼にいへと、おほせごとかさなりて、むめはさのへそ、(2オ)仙の肌こそ、さてしも、木だち、なをつよければ似ず、桜はうすいろにほふ、くれなゐ、しなへる木だちは、似つきけれども、なをふかく、こびあつく、よそをひつくるは、にるべきかぎりにもあらず、ともうす、もゝは、こきくれなるに、ゑめるは、うるはしけれど、はるかせにも、たまらぬ、えな(2ウ)らぬすがたは、いかゞせんとすらん、池のはちすの、あをきはあれど、にごりにしまぬや、けさめなまし、ふぢは、しなへども、まめやかに、おひたるもゝの、こびなく、やまふきは、くちなしいろに、こがるれども、なびけども、あきはきは、いとのかなびくに、月のおつるだに、たえざる、しなはあれども、はなやさ(3オ)しう、こまやかなれども、きくは、雪のいろ、こきべにのいろ、けにうるはしくはにほへども、賢人の風情の、すさまじさ、花の中には、似る物もなし、よしや婿が、かぎす、かつらのはなは、似てもやあるらん、

人しらず、おほひまうちきみ、よしふさ、うき世中に、あるにあらざるものは、よにあやしきものにこそ、(3ウ)わか君のみこゝろたばかりなんと、わろき天神の、わざにもや、さふらひぬらん、と申させ給へば、上にも、うちゑませたまひて、東寺の大徳、つねにさこそいひつれ、かゝるものゝ、男もたざるは、くせごとするなる、此中にえまくほすにやと、みことのり、せさせおはしければ、つかさくらゐにもかへ(4オ)て、たまはりてんと申せば、さらにたまひつ、世のおそれにも、おのゝかず、いろにしふける、はちしろひをもしらぬ、そのめに、なりぬることやあるべきと、うちなげくも、心にあまりけれど、
草も木も我大君の国にさけはおほせにちるを花そむかめや、
(4ウ)
侍従の内侍、よりきて、などをこたり、もふさせたまはざりけん、花そむかめやと、きこえ給ひしも、いちはやきみうけ、思ひきたひのなきこと、わらはも、御事をこそたのみおもひつるに、あらたのみな心のこころやと、うちかこてれば、げにうれしくは、きこえおはすれど、われもわ(5オ)がわざかは、まだうまれぬに、さだめこそあれ、はなも花のわざかは、さきいで、風のさだめはいかゞはせん、

いとはやくさくより風やさたむらん花はいつれのおかのへのちり、

ちりなんはて、ながれなんふち、とにもかくにも、さもあらばあれ、たゞ上の御ため、わらははべりては、つるに(5ウ)よからじ、東寺の大徳も、これをおもひてや、文にもかき、絵にもうつしおはしけん、われふかく、これをさとりてなり、身をおもふとて、上をやわすれたてまつらん、かくながるよも、もにすむむしの、おもひさだめなり、上の御とがよは、人のとがよは、

なかれねに夢としるに(6オ)は桜花にほふふちにもあく
た川にも、

あねぎみもふできて、ことのほかなる、そめがほにて、こはいかなる人の、くるひごころぞ、いかならん女御、更衣の、いつきもこそと、おもひ給ふ、かひしもなく、かずにもたらぬ、人のすくせ、たがなす事ぞ、よしなき例の、列女伝の、身にもをよばぬ、かし(6ウ)こだてこそ、かくはなしつれ、智も才も、身のとみ、たときにこそあれ、をろかなるは、人のいさめ、よくきよて、身のためよし、なま／＼の、かしこきぞ、世になきくせごとなれ、げにうきめ見る、もとひなるに、あたら花のす

がたや、はなのいろの、まさりぬるも、折ぬる人の、手にこそ、うらめ(7オ)しの人の、人なみならぬや、つちうち、手うち、むつかりたまふ、ことわりはあれど、いはゞ、ことばかへすにぞある、うちしほれをるを、今こそ思ひあたり給ひつらめ、こころのとくおもひ得は、いまきさひの宮とも、人はあふぐべかりつるをと、こころのかぎり、いひすて、ものぐるはしう、かへり(7ウ)給ふも、われをかなしと、おぼすあまりならん、いといたはし、のちにぞ、よみてたてまつりける、

ちりね／＼なをもにほはよの人のこころのはなやいろを
ましなん、
あね返し、

おもひとけはちりぬる花のとかもなしたれかはいとふ月も
(8オ)こそいれ(8ウ)

いもせ 八

人のこころは、かしこの人の、かしこきも、こゝなる人の、おろかなるも、いろ／＼しきぞ、くせなる、心のならひくるしく、夜るはひましろきをうらみて、身にひきつくものよ、なをとをかるこゝちの、あく心なき、八雲の、八雲の上にとびあがりぬ

る、心ちして、いか(9オ)ならんよにかは、おもふまゝに、こゝろゆきせん、さらば、たれかへだつる、さらば、よそにてやこふる、ひきかはすたまくらの上、もる人めなき、床の上、何のたらざる心ぞや、又夜はもかひなく、あけぬるまゝに、絵にかきたる人の、そのところもさらで、むかひをるや、あからめもせで、まもれども、一目くんに、見ま(9ウ)さりぬる、こびは、いくらのかずやあるらん、うちゑめる、ゑくぼは、はなに匂ひなく、月にひかりなし、いかならん、とらとりちきる人も、このかほの、ゑくぼに、あへてや、たまらん、しばしもたちさりぬるや、千とせ百よのほどふるこゝろ、いかゞせん、内へは、いかでまいらせたまはぬと、いさむるも、みゝのはしにもふれず、(10オ)たらちねの、おやの、やしなひも、たえはてぬるを、この人は、人こゝちのなきぞ、かゝる人をや、ひとならぬ人てふならし、いさめもかなはず、おしへもをよぼす、もんずぼさちをいできてがな、かのおしへまさばかは、みゝにや、こゑの入なん、ぬす人をしへわびましたるひぢりは、かなはぬためしもあれば、まして、みゝにはその(10ウ)みしたは、いかゞはあらん、あらみゝしるやと、めあかめぬれば、いかりふくめる、此かほぼせの、けにこよなさまよ、こはいかにと、ま

ゆひきしはむれば、けわろきかほの、いや匂ひまさりよと、かぶりつく、うちはらへば、はらふたぶさの、なよらかさまよ、もだへて、きぬひきかづくに、ふしたるすがたは、月のなゝめなるや、それもものはと、(11オ)かくして日こそくれけれ、よるはなをもしひのかげに、まゆずみのにほひ、ほのかに、ふにのひかり、きらくくと、きよらにて、つみもしらず、ゆびさすもわすれて、月日のたつ、弓はりも、もちも、いつの月ごろぞ、いつの、たつ日ぞ、などやらん、世中のうきことよ、つまたぬ、おとこはなくて、つまにまじはる、みちし(11ウ)れるは、まれにもなし、をどこにそはぬ、女はなくて、おとこにしたがふならひ、うかめたるこそきかね、わらはもその中に、よみませられて、筆のあとにや、のこりさふらひなん、やるかたもなきかなしきは、歌にこゝろやこゝろづきなんとして、

いもせ山おなしねならぬよしの(12オ)川よのことはりのわきてなかるゝ、

歌さへものうき心に、まとはれて、よくもよまれねば、などは、あはれもかよひて、人のこゝろも、やはらぐべき、返しせよと、かこてれど、をとなひもせず、つれなき、けしきかな、あひ見しはじめ、身をなき物におもひすてて、とにかくに、う

ちまかせつる、その一あよみの、(12ウ)たがひより、いまは
ちさとの、せんすべもしらず、かくしつと、身もたゞならで、
くるしからずは、あらぬに、なをはなれもやらねば、そのいつ
もうきよの、のりをしも、こえにこえぬるさへ、物うかるに、
此あいたは、さらに、下ひもとかぬ事なる、ならひなを、しる
く／＼なをもまどへる、ますらを心のなき(13オ)も、おもなか
らずや、人の子は、あやかしとて、かぞいろのわざ、人のわざ
ならねば、その子うまれて、人のわざしもなし、よわたる人の、
いづこをかわたらん、人の子の、人のゆくみちゆかぬは、おや
のはぢこそ、世につたはらめ、たらちねの、をやの身もて、子
をおもはぬは、とりけだものにも、しかずかし、あのみ(13ウ)
きの、ひめぐまの、いつかはそのころ、あらこまよりくるにし
も、つれ行や、なけく／＼、

人やむまむまや人なるすめみこのかひのくろこま聞にしろ
しも、

玉のむすめさへ、いできたる、うれしきは、たゞ子のあはれを、
しりたるなるへし、(14オ)

みとり子をおふしたてゝやたらちねのちぶさのあはれかき
りしるらん、

子はもたれども、なをもあくけもなく、内へもまいらず、さと
へもまふでず、大みきたまはりたるけにて、けふもこよひも、
たゞほれはてたるは、身のをこたり、かゞみかけたり、せんか
たなくて、たばかりけり、ありしわざ、(14ウ)みなしるしを
きて、見つよと、わざと、みづしに、入をきて、しらぬさまつ
くりをる、これを見つけて、こはなにごとぞやと、おとろきい
ふ、おほやけには、しくわんとてありて、君のよしあしの葉を、
かりしるして、のちの世にこそ、のこしさふらへ、わたくしに
は、人のつまの、ありて、かくれなく、みそか事、見を(15オ)
きて、いふなり、いまはむつましかれど、のちはすきみたつ、
たのみなき、あだし世中、かくす事、こゝよりあらはれぬは又
なし、それは、しくわんにこそ、人のめの、夫のわざしるしぬ
る、ためしやはあらん、かのくわん、つかさとりぬる人は、忠
信の道に、したがふ、筆のあとにはあらずや、孔子ともふせし、
ひぢりは、し(15ウ)くわんにてやは、いまそかりける、何と
もの給へ、露もらさで、水ぐきのあと、をよぶかぎりには、おひ
らくの、後のむかし、おすれぬは、子よりをかきことあらじ、
すさまじく、いぶせくやありけん、のちは、内へもまいりけり、
こだまの人につくなる、やまひも、又いえぬるときもこそあれ

と、内にて人々／＼わらひ、おはしけり、それ(16オ)より、や
ゝ、さとへもいきければ、かぞいろもうれしげに出ぬる、しか
／＼たばかり給ひし事聞て、よにうれしくとなん、いひをこせ
おはしけり、人をは、やゝ、たばかりさふらひつれども、身の
たのみは、露さふらはすと、これさへあるに、たれもあだなる
こゝろならし、おともたる、子もたるにも、人のかず、玉づ
さのかず、かず／＼ふりくる(16ウ)あめの、あししげきは、
世にみちてふことのなきや、わか身ひとつのかゝるむくひや、
あはれむまやどの、ひつぎのみこ、いまの世に、おはしまさば、
かゝる人々も、道なれて、くせ事するはあらじ、いかなりけ
ん人の、かの世にあれあひて、みちならぬ、うきめ見るごと、
のがれけんと、身のうさに、人のよきよを、うら(17オ)やむ
も、まよひながらも、又むべなりけり、世中の人をみな、柳下
恵かごとせば、うき世は、すみよからまし、出ゆけば、車のま
へ、しぢのほとり、ふみ三つ、四つ五つ、見ぬはなく、内へま
ひりて、出もし、入もする、玉だれのかげ、みきてふのはしに、
人のかくれおる、けはいも、袖ひきとむる、けさううるさく、
みやび、さくかたなし、君の御(17ウ)わさは、はちす葉の、
水いでたる、みいきなるに、上にならぬ、下もこそあれ、

あめきよみ月すむ下のこかけ／＼そらにならばてなとくも
るらん

かのひつぎのみこの、かみしもみな、きよかりしは、みことの、
あれましなからの、みわざ、みおもひの、うちと、きよかるに
ならへる、をのづからの、ことほりなるべし、きみ(18オ)は
まなびまして、見わざきよかれども、御心のうちに、のこりけ
るけや、しもけがすらん、げに上ひとりこそ、よにおそれある
御ことならめ、又おもへは、かくさがなきも、女のいろに、ま
よふばかりの、まどひのみにしもあらじ、股上にて、われひと
り、をしいでたる、くせ事の、おこたりにく、あやにくなる
人の、心にやあらん、人のめに、人(18ウ)の玉づさ、人めし
のばぬ、よになきことなり、いかなるさきもや出こん、とても
よからじ、身ひとつすてはてゝ、人の身、やすかれとのみ、お
もふこゝろの、いろこそ、まさりゆけ、さらでだに、いもせの
中は、身にもかはりなん、なをしも子さへあなる物の、みる／＼
いできなば、いかどはせん、わらはゝ、よにあやし(19オ)き
ものぞ、あやしきものは、もたらぬ物ぞ、物をしすれば、さき
くはあらで、さきこそあれ、とむるに入ぬ、月やはある、おし
むにとゝまる、花もなければ、だいがのはやしもかれてぞ、つ

るのなはある、かれせぬわか中も、などか、かれくならざらん、うたがひ、あやにくなる、うき事の、たねなりけり、なをあやにくなる、(19ウ)世のくせとて、人く玉づきこそ、あめふれ、ことをとこの、きよらなる、おほかめれば、なを、をとこそんとや、われしりたりとひしめく、おろかなる、ますらおのこころは、わらはめの、おもふにも、をよばぬは、まだゑいのほれこそ、さめざりけらし、わが身、大君の、おほん身にしもあらば、世中をしやらひて、ひが(20オ)ことすると、せいしもこそせめ、うたての世や、いまにぞからき事、見るべき、うき世のかぎり、とりのあとにやのこりなんと、うちひそみ、なきいさすり、かこてれば、いやうれはしと、たわけぬるは、たゞならぬ、けにそ見えぬる、こは鬼ことなるは、誠ならじ、ひゑの山の、ひぢりにも、かたらひて、この物のけ、ず(20ウ)して、やめなまし、なをうちゑみて、よだれながし、きえていまは、いまそからぬ、さいてう大徳、いできて、ずせさせませよと、せめては、はらたちもせよかし、(21オ)

「玉つくり物語 七」

(題簽欠)

たまの通路 九

なにがしの少将の、わらはを、きつねのばけよるとはしらで、まことの人とやおもひけん、文しきりにかき、歌はかりなくよみて、おこせぬる、いでやばかしておもひあたらせん、かどにくるまこそありけれ、このしぢに、百夜かよひませ、百夜にならばあひ(1オ)見なん、もし雨のふり、風の吹とて、こずなりなば、かならず、あはじといへば、あめのよは、袖うちかづき、みのかさにあて、月のよは、扇子うちかざして、しらくしきかげに、人めしのぶ、けはいなる、おほろ月夜の、たそかれめける、しる人やあふ、なを見しらざるやと、こころづかひして、たちとどまり、(1ウ)はしり過て、しぢにかずかく、やみのよは、おにこそ、人をくらふに、おぢおそれぬる、こゝろなきも、こひほど、たぎれる、たきつせはあらじ、九十九夜になりて、風の心ちして、うちふしにけると聞ゆ、こゝろはこゝろにぞあるらん、げに、くんしといふくらゐは、たはふれごといはぬ、たうとき(2オ)こと、いまよく身にしりさふらひぬ、わか身をつみて、人の身はしるらん、むべなり、此おそろしき

きつねの、つゐに、少将をばばかりしてげり、後の世おそろしく、あはれなりければ、九十九夜の数に、かきそへける、

あかつきのしちのはしかき百夜かききみかこぬよはわれそ

かすかく、(2ウ)

あかつきの、鴨といふ鳥こそ、百羽かきするとて、

あかつきのしきのはねかきもよ羽かき君かこぬよはわれそ

かすかく、

これは人丸の、もうち君、人のこぬよを、しるしてよめるを、

いまわが歌によみかへもて、よみしなり、おふむ歌といへる、

歌のすがたなるべし、(3オ)これはむかしの歌の、わがいま

の、おもむきにかなひたる、そのことの、いさゝか、かはりな

る、あるは、そのこと、そのことの葉、その上を、一もじ二も

じ、ひきかへて、かのすがたを、ひきうごかさで、よみなすな

り、又わりむがへしといへるも、あるやらん、これは、人のを

こせし歌の、一もじ二もじ引かへて、こゝ(3ウ)ろ、みなか

はりて、返しとなるを、いへるなめり、なきたまは、いかゝは

おもふ、こんし金泥もて、心経書てたむけて、

人ことのこゝろのはてはあまつそらおもひもこひもうぎく

ものあと、

少将のたま、もふできて、うらみはらさんとは、おもひたまへど、みのりのたむけうれしくとて、(4オ)

かきくらすこゝろのやみにまよはすは御法にはるゝ空もし

らめや、

人のたまと、いふことありとは、人のくに、わがくにの、文の

なかにはさふらへども、われと見る事は、まれにこそさふらへ、

いま目に見たまひしは、めづらし、人は鬼となるところきこえ

つれ、これをや、のたまひけん、身(4ウ)まかりたる人の、

たまはむべにこそ、いける人の、たまもありけり、あるさいし

やう、よばひけれども、例の文返しせぬくせにて、とし月へし

が、いかにつよく、門さしとざして、かためをるにも、かぜの

ひまもとむるごと、うち入て、くみあひける、からかひまけて、

うちふしにければ、おびもひもよ、をの(5オ)づからとけて、

すどろにいねてげり、かくしも、三たび四たびこそあれ、のち

はよまずなる、いとうれたし、これはまことの、きつねさめり

と、よにあやしかりける物から、のちにこといかにぞととひさ

ふらへば、たびごとにいきて、あひたてまつりつる、うれ

しきといふ、その時はいかなる(5ウ)こゝちしたまひけるに

や、ぬるともなく、さむるともなく、夢ともうつともはから

ひがたし、たど行てあひ見て、うれしきのみ、あふことは、さとりぬるきわには侍らず、君がよみける歌、わが返しせし歌、おもほえたまひけるや、げにさることこそあれ、(6オ)

おもふにはいははたまらぬかよひ路をたかもりてかはあはさらめやも、

君か返し、

世の人のかよふ道よりかよひこはわかせきもりのいかてゆるさん、

かくこそおぼえしかと、かたるに、身のけ、いよだちてげり、神にもいのりおはせしか、又君かこころの、たぎりの(6ウ)みにやしらず、(7オ)(7ウ)

うつろふはな 十

あらたまの春の、たちかはりつゝ、すぎゆく五とせ六とせは、夢のゆめにて、かたちの花も、やゝうつろひ、こびのにほひ、うすらぎゆくや、老らくの、人ををひかけくる、あしはやみにてさふらふ、あきたらぬを、かぎりこころのまゝに、まもりをるは、やがてあきくるためしなるべし、(8オ)女はあからさまには、おもはぬ中に、おもひぬるも、なれゆくまゝに、おも

ふこころぞ、まさりゆく、をとこは、はじめのほどこそ、身もなく世もなう、よぼひわたれ、いつぞのほどに、こひさめ、なさかけれそむるぞ、はしめなる、夜にまさり、日にまさりて、うとき中となりゆく、これなん、をとこ女の、こころことなる、(8ウ)さかひにてさふらへ、男になかくおもわれまくほしからば、めづらかなる、ふるまひこそあらめ、やどのせいしより、となりのほもといへる、世のくちことなる、男のこころは、みめの、おとりまさりにもよらず、たどあらたまり、めづらかなるを、このむ、それをぼしらず、われこそきよらなれ、あのわらはの、きたなげなるにと、(9オ)かこちぬる、それは、わが女心をのみしりて、人の男こころしらぬにてやさふらはむ、このおとこも、ためしなきかぎり、よぼひけるや、はやあきたらぬ心も、あきたりなん、おもへは、かゝる女にそひはては、いかにこころにせきすへぬれとも、見ることにまよひ、こころのゆくりもなく、人々の目ひき、ゆびさして、わらひたまふ(9ウ)も、いまやゝことはりしらるゝ、とにかくに、おもひわびて、よしやたのまじと、いでゝ行けり、われもさばかりこそはいへ、いまなごりの、あはれなくてやあらん、

いろ見えてうつろふ物は世中の人のこころのはなにそあり

ける、

と、うちながめて、とどまりをるに、ころは、やよひの、もち、
すぐるに、はるさめ、いとふり(10オ)つどきて、にはのさく
らも、うちしほたれ、はやかつちりそむれば、

花のいろはうつりにけりないたつらに我身よにふるなかめ
せしまに、

かくて、世中うかれぬべき身となりけるまゝに、文屋のやすひ
で、みかはの守かけて、くだりぬるとて、よきことよもや、お
もひけん、あがた見にゆかじやと、いひおこせさふらへば、

(10ウ)

わひぬれは身をうきくさのねをたえてさそふ水あらはいな
んとそおもふ、

とはいへと、あがたには、いかず、ひとりある身は、いと心き
よく、物あんじする事もなきに、なれしおとこの、みちのおく
へ、いでたつとなんきくに、たびは物のいぶせきことのみしげ
く、行衛こゝろぼそくのみおもふも、こゝろつきして、行かへ
れとて、(11オ)

しら川やよをうきしまもありといへはせきこゆるきのいそ
かさらなん、

みちのおくより、ふみおこせて、すぐるにたちわかれて、いま
はきみがおもかげのみ、身にそひ、君かことのみ、心にあまり
て、くやしきことの、かひなくこそと、かきければ、返しのお
くに、

わすらるゝ人めはかりをなけ(11ウ)きにてこひしきこと
のなからましかは(12オ)

玉つくり物語 八 (題簽)

いろこのみ 十一

月をなす、こゝろの、かたちこそなけれ、すみわたりたる、き
よさは、あぎのそらにしも、いくらのけぢめか、あらむ、かく
はすみ、すめども、こゝろのねざし、かききりて、くものをこ
り、はた、はて、すみはて、ぬるにあらねば、いかなる、風の
ふきをこす、くもりにか、かきくれ(1オ)なんと、そらおそ
ろしきに、おもはぬ事かとよ、在五の君、くるま、かきよせて、
いかなる歌か、よませける、このやどの花見ぬ、はるさへくや
しきに、にはのいとほぎ、露にやちるらん、此ころすぎゆかば、
月も、やゝ、さびなまし、ともにながめて、きみ、ことひきま

さば、われは、びはこそとて、さし入おはすに、そのころも、
とし(1ウ)月とをからで、うめかうふり、したまひつれば、
なをさらに、ちごのすがたも、さりやらずて、まゆずみ、ほそ
う、かけるは、春のかすみの、さきそめたる、と山の花に、その
いろをおしみがほ、やぶさかに、ひきつゝむかほの、一なびき、
なをそれは、いろをうごかす、にほひこそなけれ、月にふりさ
け、さしむかひて、ゑくぼたえねと、ほの(2オ)ゑめるは、
梅がえに、はなをねたみて、ふりをくゆきを、おぼろ月夜の、
にほへるかげ、しのびく、ひかりをみがくが、それは、げ
に、てれるしなつたなし、いかなる、さかによらひの、おほん
おぼと聞え給ひし、そろいじんせし、まか、ばさばだい、びく
にといふとも、見るとし見ば、こゝろやは、うごかざらん、見
るに、まばゆきこゝちの(2ウ)あまりに、いはんことかは、
わらはがほどは、いくらばかりにか、なりさむらふらん、君み
たまへと、あきふるひていへば、はたちばかりにやとの給ふ、
なにさるには、さふらはむ、はやさだすぎしは、いつのころに
かど、くねれば、おほかたの美人、なをとしはよらぬを、まし
て君は、世をたえたる、こだまとこそ、人はいふなる物をと、
(3オ)なにこゝろなげなり、あはれ、つゝばかりをも、よぎさ

ふらはど、君をたどにやは、かへしまひらせんと、うちしほれ、
わびたる、けはひを見せつれば、よしなき、しほれや、をそも、
まことも、いまこそあらはれめと、かどみかきさぐりて、かほ
うちならば、月かげして、見給へば、君のこびのうつり、わが
いろのうつろひ、月にうごきて、き(3ウ)らくと、かどみ
は、ひるよりも、ますみなる、げにはたちばかりに見ゆる、君
は、三五ばかりにぞ見えます、ことをひきよせて、わればちお
さん、君かき給へと、かたみにいひしろふ、きまけおはして、
ひき給ふけり、一きよく、なかばなるに、月のかつらも、花ち
りをちて、ほたるこぼるゝ、こゝちぞしぬる、ひきもたえず、
聞も、たえねば、(4オ)曲もをはらで、かきやみにけり、き
みも、かへり、たまはんとして、かへるをわすれ、われも、と
どめんとして、とどむるをわすれ、をきてや、ふけらん、ねて
や、あかしけむ、夜ははやあけて、やもめがらす、けしからず、
げに、なきをちて、とをき野寺のかね、あとまくらに、こゑい
たりけるに、うちおどろきて、かへらんとしたま(4ウ)ふを、
しばし、もの見んとて、こしかきいだけば、ほそう、しなえる、
はだへの、つめるわた、一たばね、かきよせしより、なをたえも
せぬは、かひなのうちにしも、きえやゆくと、をしかたむけて、

かほうち見れば、びんのくも、ひたいのはな、まゆのかすみ、
目のはちす、はなのたまき、くちびるのぼたん、をとがひの羅
に、ほうの(5オ)月、すがたのやなぎ、うつり香のむめ、い
かなる天の、たくみの、つくりいだせる、せんげんぞや、女に
やと、うたがへば、ほそやかに、たちすめり、男かと、かへり
見れば、たをやかに、ものよはし、めほれ、心きえゆくに、い
つかへりましけん、おもほえず、ひと日、ふつかこそ、たてれ、
ちとせへたりし、こひしさの、うたゝねのゆめも、きみがたま
(5ウ)もやむすぶらん、

おもひつゝぬれはや人の見えつらむゆめとしりせはさめさ
らましを、

こだまもしびをかゝげ、よそをひすゝむる、あかつきも、し
らみはて、日もたけぬる、なをあひ見し、こゝちして、ひとり、
ゑみする、人はいかゞ見るらん、ありしゆめに、ならひけり、
なをゆめこそ、見め(6オ)と、たのめし日の、くれをまちぬ
る、ことならで、まだよひのまも、すぎなくに、うちぬるとて、

うたゝねにこひしき人を見てしより夢てふものはたのみそ
めてき、

かくおもふくまの、人のこゝろに行てや見えけん、からひつも

たせて、こさせたまふ、こゝろもとなさこそあれ、入おはし
(6ウ)て見ばやといひつかはしければ、やがて、いらせおは
す、からくれなゐ、ときあけて、こまにしき、をしひらき、と
りいだせしは、わたり三尺ばかりもや、あらん、ますみにぞあ
りける、うてなして、かけもて、さうじ、をしあけ給へは、ふ
ゆならぬ、ゆきやふりける、ちりはてし、もみぢや、まがきに、
かへりつもりけん、こがねのはく、(7オ)くさ葉に、もりか
けしやなどおもふ、きくの、をのが、いろく、たゞいま、さ
きいでたる、このはな見て、かなでざらめや、いざとて、ころ
もで、ひきたて、あふぎひらき、をしつけ、われもひらきて、
いざくゝとて、げいしやう、まはせおはす、心はじめは、日か
げの、しもに、しづみはて、のちは、あまつ風、ゆくくもに、
なり行て、たどりたちまふ、かゞみに、うつ(7ウ)れるかげ
は、いとぎくら、しだりやなぎ、春のかぜに、みだれあひたる、
いろぞともなし、このかげ、かゞみに、うつれるまゝに、かく
て、きえざらば、世のもてあそび、これにしくものやあらん、
かくもすぎにたれば、たまくら、ひきかはして、そひふしたる、
月と花と、よせあはせ、をしまとへる、かゞみのうちに、くま
なく、身にそふしなひ、う(8オ)ちゑめるかほ、かのからく

にの、はくらく天が、ふでのげいも、いかどはをよばん、はじめこそ、ものゝしなの世になきことも、おもほえつれ、のちはみな、夢に入て、こゝろ、かきけちたり、

ちはやふる神代のやとりよつの月にさきぬる花やこゝのつ
のくに、

かへし、(8ウ)

くろき木のゆみにひきそへとりにむかふ春ののらなるみつ
くきのくき、

かりがねの行かへる、つかひも、しげかれば、人はいかど見る
らん、とおもへど、この君は、歌もあやしう、よみ給へば、そ
のこともこそあれ、くるしうもあらぬなど、おもふおもひ、思
ひめぐらせば、いろほど、人のこゝろ、まどはすものはあらじ、
(9オ) 目に見えたる、くせごとなるに、あらぬことはり、お
もひつけて、むなやすめする、えてかたごゝろなるや、うたて、
いろにしまどふは、いふかぎりにもあらず、さらぬ事にも、え
てかたごゝろには、さばかりのまよひぞある、ちはやふる、神
のよみはじめたまへる、歌をしも、わがいろこのむ、なかだち
とも、するかな、うたは、いもせの中の、(9ウ) なかだちと
なるは、それは、かぞいろの、あはせぬる、いもせの中に、ざ

りけり、これは、わがこのむ、ひがことの、中だちに、おもひ
あてたる、あさまし、又おもへば、歌のみかは、見れば、僧は、
七のほとけの、おしへを、わが得てかたの、きたなき事の、な
かだちとし、はかせは、五つの経の、教へを、わがえてかたの、
ひがことの、なかだちとする、みなま(10オ) ことの道はなし、
此きみは、世にはすき人と、いふめれど、わがこゝろよりはな
さず、世中の、女どもの、あながちに、こひくへて、よりたか
りて、ばかして、たはれ人の、名をぞおほする、それもおほか
たに、ものするには、こゝろよせも、したまはず、げに、まめ
やかなる心ならし、世にたえたる、すがたこそ、うたて、われ
は、世には、かしこきといへ(10ウ) だ、このたびの、まどひ
は、わがこゝろよりこそ、まどひつれ、あなはづかし、このこ
ろは、心ほれはて、人ごゝちもなし、こはいかなる事ぞや、聞
しことぞある、かのゑんま王宮に、はりのかどみてふありて、
人のよしあしの、わざのすがた、うつるに、みようくはんたち、
せめはぢしめて、つみのむくひを、さだめ給ふとこそ、さしもこ
ゝろは、(11オ) すみつる物を、かく、くもりはてけん、黄河
のすまでしあらば、とにもかくにも、なましむに、一たびすみ
て、又にごりはてて、かのはりのかゝみも、いとほづかし、人

しらぬことの葉や、人しらぬはなし、人のいろこのむ、いさめ
がほせし、いくたびのかず、よまゝしかは、人のうゑには、す
みぬる心、身の上には、にぐるなるこゝろ、いくら(11ウ)
こゝろ、かくしをくらん、きよき心も、人にこそよれ、とり
くならん、いかゞせん、よし、人よりも、こゝろ、まづはつ
かし、われこそ、世の人の、心まどはず、ふるき、きつにとこ
そ、おもひしが、きつ、ふるきつをも、なをばかしぬる、こた
まこそあれ、人のためをさへ、きつのきつに、はがされますな
さは、ばかされじ物をと、おもひける身(12オ)の、身にとり
て、はがされ、はてなんやとて、ありし、かゞみ、ふたつに、
うちわり、かたわれを、のこし、かたはれを、返し、つかはす
とて、なが歌、よみてやる、

ちはやふる はりのかゝみの かけてうつす かけをもし
らて きみとわか ためしもきかぬ ありさまの たつお
もかけも はつかしや よし一たひは まよふとも 又や
はやみに(12ウ) 入ぬへき 二つにわりし ますかゝみ
いかてふたゝひ あひぬへき こなたにのこす かたわれ
は 君かおもかけ とめをけり そなたへやれる かたは
れは わかすかたもや のこるらん これをかたみに お

なしくは きよき心の ともとなり なりてののちはそ
のゝちは ますみのかけを けかささらなむ

在五の君返し(13オ)

ますかゝみ 二つにわりし わかれちは なさけなくとは
おもへとも ますみのかゝみ ちきるこそ 世にためしな
き なさけなれ ふたりかかけの うつりしは 又世にあ
らん かけならず よしやうきよに なきものは かなら
す世には なかゝらす われてふたつの もろかたみ ほ
とけのくにゝ もてゆきて はちすの上に をしあはせ
こゝろの月の(13ウ) まとかなる きよきひかりの か
たちとをせむ(14オ)